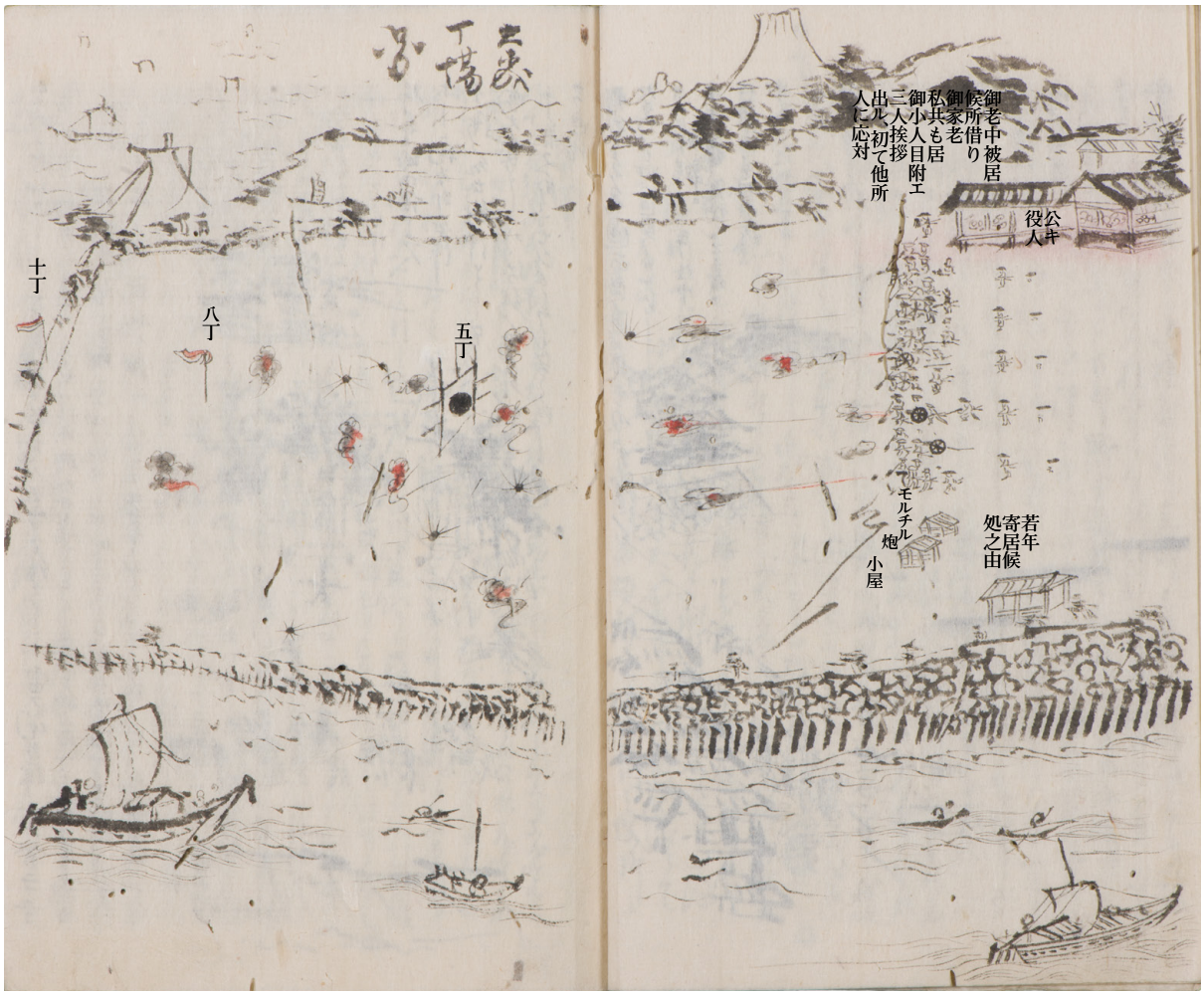


図１
元治元年
十二月二十三日
大森丁場図

図２
元治二年正月朔日

図３
元治二年正月朔日　御褄束被遊候所愛々敷乍恐認

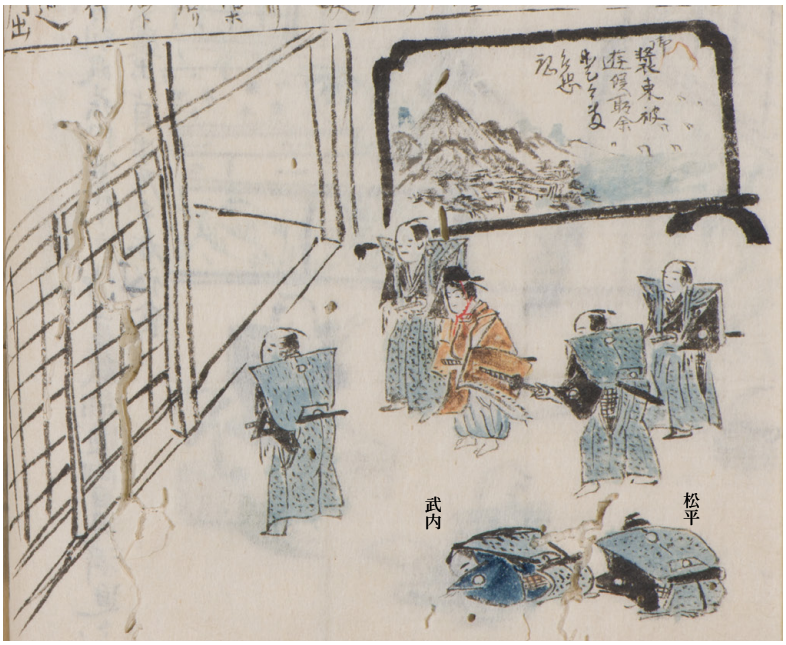


図４　極月廿三日暁大森行見たる図

図５　正月元日年礼図

図６　江戸中正月はんこひつきの図

図７　丑正月元日新吉原中町廻、造酒助黒羽織着シ笹元腰に差、能見候得は美人□居図也

図８　正月初ての捕物竹内組高名図

図９　正月凧揚　正月乞食

【資料紹介】

松平造酒助江戸在勤日記

―元治元年十一月朔日より元治二年正月十一日―

根本佐智子
古宮雅明

【キーワード】
松平造酒助　庄内藩　元治年間　江戸市中取締　新徴組

【要旨】
当館所蔵「松平造酒助江戸在勤日記」の翻刻。筆者松平造酒助は庄内藩士、家禄は千四百石。組頭や家中武器取扱掛をつとめた人物である。造酒助は元治元年八月より慶応元年八月まで江戸に在勤している。
本稿は元治元年十一月朔日より元治二年正月十一日まで、全五十綴のうち、「十四」、「十五」、「十六」、「十七」、「十八」、「十九」、「二十」、「二十一」を掲載した。正月に絵具を入手した造酒助は江戸の年末年始の諸事を丁寧に描いている。その部分はカラー図版で掲載した。

凡例

一、文字は原則として常用漢字を用いた。変体仮名はすべて平仮名としたが、例外として格助詞の「え」は「へ」に改めた。
一、明らかな誤字・脱字は右傍に（　）で正しい字を示し、推定できるものは（　ヵ）とした。意味不明の場合は右傍に（ママ）を付した。
一、原文中の朱筆は「」で示し、（朱筆）とした。また原文の虫損・破損・判読不能の箇所は字数を推定し、□または［　］等で示した。
一、原文中の抹消文字は基本的に掲載せず、訂正文字のみ掲載した。
一、平出・台頭は二字あけ、欠字は一字あけとした。
一、図の彩色部分には煩雑にならない範囲で註記を加えた。
一、巻頭カラー図版掲載図に関しては該当箇所に（図○入る）と示した。

書誌情報

「十四」二四八㎜×一七四㎜　竪帳　墨付二丁
「十五」二四七㎜×一七五㎜　竪帳　墨付五丁
「十六」二四九㎜×一七五㎜　竪帳　墨付七丁
「十七」二四六㎜×一七〇㎜　竪帳　墨付二丁
「十八」二四七㎜×一六八㎜　竪帳　墨付二丁
「十九」二四四㎜×一七〇㎜　竪帳　墨付九丁
「二十」二四八㎜×一七三㎜　竪帳　墨付二丁
「二十一」二四七㎜×一七〇㎜　竪帳　墨付二十四丁

【第十四冊】
「十四」（朱書）
（朱書）「十一」月六日弁蔵下、廿二日着、廿四日届、書状ハ不参候」
十三此ノ後ニ在り

十一月朔日

晴天、今朝吉弥立へ書状差出し、今日引込主馬へ頼遣、御用ニて十兵衛来ル、金弥来ル、昼過源四郎・藤介来ル、暮前伊三郎・金弥来ル、馬具師来ル、三度掛大振故能見候様為見候処、是ハ冬ノ綿入之三度掛と同様寸尺故、綿入と袷と同寸尺ニて大違、長く提り候故、袷三度之寸尺同様ニ可致と申候間少詰候様申付ル、今宵は誰も不参故六ツ過伏し

毛引今朝之扣へ入、上候間御便次第御状ニ入可被下候

同二日

日々快晴、金弥・仙大夫来ル 此両人は御預人常右衛門・濱治両人之出納役両二歩壱朱入有之処粉(紛)失ニ相成、其為時々参、大目付働可相成甚気毒也云々ニ付今日出勤、例刻出ル、御用は大透、云々之義兵部殿へ内話いたし、当五日賢妙院様御法事ニ付九ツ時熨斗目上下ニて相詰候様被達候、昼過引、吉弥御礼上下ニて出ル、柳原へ寄着物着替、八ツ半過引、綿入二ツニて肝(汁)ニ相成、誠日本晴と可申、富士山抔ハ霞候て見へ不申、朝々大霜真白也、庄内は奥御居間之巨燵(炬燵)、柿・梨子・栗・餅を足延給居候半、御夜食之御賄ニかゝカ御聞ニ出候ハヽ、豆腐ニ此頃腹らゝ子、今晩は先ツ鮭之切込味噌漬有之からよひと被申居候半と遠察罷在候、此方ハ汁、朝之大根之おろし汁ニ菜当座漬のみ、干味噌出し、夜食は極よく鰯し為知(求カ)、肴茶屋為走候哉、付候事も有之、折々平斗付候事有之、庄内黒ここ焼干ニ、人参・芋・コンニヤクまたは湯大根、折々豆腐汁ニ候得共庄内より飯甘ク、鮭ノアン掛給候より甘く食し居、御殿へハ人々箱弁当なれとも、私は野合ニ持行候割合、香物入は手作之組割合ニ香物五切位ニ煮豆、気根(惣カ)も能入候、私も気根よく給居候、兎角織人ニ感心なりとて被笑候、岡吉抔私共より〇（〇上欄外「甘物」）不被給と食事中参り笑候間倹約いたし候様此頃も能申諭候得共、召仕候男之ナリキニ相成居候由、岡吉斗へ申含候とも不埒明、困候事ニ御座候、御組寄合ニて集、四ツ過帰、天ニ無雲(ママ)無之処急風吹雨

同三日

雨晴次第天気晴、朝寝いたし居候処丸子伊太郎参ル、漸始末合逢、五発打短筒久安以見、伊三郎・周作・藤助来、一同感心いたし、朝飯亥太郎へ出、短筒留置例刻出仕、御用とんと無之、政右衛門は当九日ニ立、手伝之丹吾・源右衛門近々下候様昨日達、昼過引、多門寄、藤助・中恵来ル、寛々噺いたし戻り、御用有之柳原二内へ寄、金粉失一件相談いたし、暮過帰、市中廻用金之事ニ付世話役呼集、四ツ過帰、晴夜火事毎夜遠方也

四日

晴天、丸子ちゞ参ル、五発カラクリ船来粕来出又々持参、中嶌仙大夫来ル、例刻出仕、誠能日和日本晴也、御用も無之八ツ頃引榊原ニ寄御用達、殿様御風邪御引込、実ハ御溜詰格之御登城之御調は不致出来候由、明日は賢明院様御法事ニ付清光寺御出被仰出、私とも拝礼被仰付候、御小性頭と申合熨斗目着し、紺之足袋・襠高袴へ割羽織、長上下は先ニ清光寺へ遣、両刀ハさし行候積、七ツ前帰、明朝は湯つかひ候故其用意いたし候様申付ル、ものくさ太郎、九十日余明日ニて四度目也、五ツ頃伏し

五日

曇、寒風難絶(堪)、支度中ニ金弥来ル、早々返し五ツ半頃より参ル、芝迄長道退屈いたし、大通ニて能絵之凧見ル、近々参り整可申、四ツ過清光寺ニ至ル、上ニて御戻不済内玄関より直ニ御法事奉行之男四郎詰所へ参り候処政右衛門も来居、甘物沢山有之、男四郎ハ御法事之間へ出居候間、秋保と男四郎へ出置候甘物と茶呑食居候処、女中よりとて丸飯ニ、ヒタシ・煮〆・餅遣し、大食いたし居候処、主馬も参候と申案内ニ付私とも詰所参ル、御家老衆と屏風し切り、兵部殿被参、茶も不出甘物無之、い

つれも弁当使、自拝済、又々男四郎所へ参り、私保（秋保）と私・多門と又々甘物給、寛々休足いたし七ツ頃帰、庄右衛門呼、刀脇さしニ油ヲ為引、伴弥・平内用ニて参ル、暮々帰、半蔵出、雲州ミかん弁蔵殿へ頼七ツ上候と申、御預人之金子粉失一条ニ付六ツ過より鬼さん柳原住居故参ル

明日弁蔵出立ニ付書状も上候処候得共控へ続一筆認候

日増寒気ニ相成候得共、益御機嫌能被遊御座恐悦至ニ奉存候、私大丈夫ニ御座候、先之（ママ）御機嫌伺のみ奉申上候、折角〳〵寒気御厭可被遊候、尚奉期幸喜時候、以上

十一月五日　　松平造酒助

御父上様

御母上様

尚々今日見候凧絵、政右衛門九日出立仕趣、其節あまなつと・凧、伝吉へ差下候、尚期幸便候、以上

【第十四冊終わり】

【第十五冊】

「十五」（朱書）

「十一月十九日立晦日着十二月朔日達候」（朱書）

十一月十日

晴天、引取より榊原へ参り書状颯と認さし出、今日十兵衛妻之百ヶ日なりとて納豆汁ニ油揚地走ニて、五ツ過帰

同十一日

曇、今日本所小笠原圖書様之屋敷圖書様は兵部殿実家本所矢場普請中ニ付へ種ヶ嶋門人稽古日ニ付短筒三挺、外ニ壱挺打試ニ昼より権十郎殿と三内誘引参ル、丸子伊太郎来ル、甚寒く薩摩芋度々取寄御地走なり、暮頃帰、明日品川沖蒸気舩見物ニ両大夫・私・男四郎、其外都合十五人、馬之極ニ参候積なれとも、天気甚無覚束候得共、早暁より約速（束）故支度いたし、渡舟中難堪サムキ由ニ付、羅紗半合羽取出着し美（ミ）候処、肝煮如、羽織丈長キ故詰ニ掛候処伊兵衛来り、其内権十郎殿より明日行五ツ前より尚又明朝之相談と申越候ニ付、妙事と伊兵衛と噺いたし、伊兵衛は五ツ過より権十郎殿へ泊行、合羽詰候、とこやら鼻気塩梅故早々伏し

同十二日

暁七ツ過ニも可有之、起候処雨天なり、雨候節止候約速快又伏し、五ツ頃目を覚し、弥鼻気故終日休、寺内来り今日御出ハ如何と申ニ付、雨之為相止候、権蔵申候は只今承候処、今早天本所四ツ目御屋敷之一間置御隣之御旗本ニ千二百石位取小栗九郎右衛門と申家ニ水浮（永府）浪人両人籠り居候ニ付、十兵衛御備組召連、其外御物頭持組連参候由、いつれ町家と違、容易之事ニ無之、其外吉原へも同刻石原源四郎自組連参候由、御聞不被成候哉と申ニ付初て覚、十兵衛甚案事候、小一郎等一両人戦之場所走り行度旨申聞候間、参候様申付ル、少過小一郎あへき〳〵走り帰候て何事無之、浪人門前ニて被縛候処見候由申ニ付、十兵衛抔如何いたし居候哉と承候処、門前辺フラ〳〵被致候て御人数ハ其家取巻ニ斗也と申ニ付大安堵仕候、源四郎ハ吉原ニ無之、別之処病人ヲ捕、都合三人ヲ松平石見守殿へさし出候由ニ御座候、中恵参ル、御徒目付茂作来ル、大伏いたし早々伏し

同十三日

曇、源四郎・周策・帋七来ル、今日も終日休、昼寝いたし

同十四日

晴天、伊三郎今日出勤仕候とて来、扨御組ニて昨夜日本橋一丁目翁庵料理屋ヨリ注進ニて非詰（常脱カ）私御組二十人即走り行候て捕候処、松平下総守様之御家来之由ニて、両人神田橋稽古所ニ入置候由、家来只今帰噺御座候と申、

如何成働いたし候哉、酒酔なれとも初て之事也、取斗方無心元存居候処、権蔵只今帰候とて来ル、昨夜如何成合戦いたし候哉と承候処、九ツ頃ニ乱妨仕候と申注進ニ付参候処、唯今逃行申との事ニて一同無張合存、模様聞糺候処、御覧、刀抜切候と申ニ付見候処、障子縁二重成居候処切コモ切レ居候、段々承候処、懐中なく相成候て当人叔母を呼呉候様申ニ付呼ニ遣候内、酒井様之御人数参と申候処、駈出候と申、其女と聞候処、そこニ参居候抔申内、ソツト走候両人叔母連ニ来候処、町人とも見付ソラ来タと申ニ付戸口より出候処、見一参駈走候故追候処、身体(進退)極り誰家来と色々申訳仕候得共、是非とも屋敷迄御連申、其上重役得差図不申私共切ニ取計候事ハ不相成と其侭連、稽古所へ入候、きつと立派なる侍無面目とて頭上不申、四五人番ヲ付居候内色々噺仕候内、下総様御溜り当時御筆頭ニて、殿様此頃御出被遊、御供迄一同御地走ニ相成候節、殿様御膳ヲ出候節、御宮仕ニ出候者ニて、御酒も被召上能殿様抔、御屋敷此頃御使者参り候抔色々罪軽相成候様申候、奇妙之御縁組御取交、松平右京亮様の御本家故御縁女様之御名何と被申候哉と被聞、番仕居候寺内抔答ハ不出来閉口仕候由、其噺私大笑仕候、此方之御留守居より先方之留守居へ内々申遣候間相戻候取計候趣也、無面目とて頭提居候体無慙噺御座候、昼後隼人・四郎右衛門来ル、暫噺帰ル、暮過ニ権蔵又々来り尚御屋敷御組不残柳原へ引移候趣申出ル、貴様と聞候処、私ハ秀策処へ今日一宿仕候間明日柳原引移趣ニ付、左様ならハ我も明十五日ニ引移可申候間、土鰍汁いたし候とて即申付ル、権蔵鳥渡とて帰、秀策と権蔵酒一陶・酢(鮓)一種・ツキノ味噌烹鰹を掛持参、酒ハ六七盃ニてなくなり、町へ為走出候、後吸物・湯大根、私酒呑不申故一滴も無之、為走候得共手間取、饗有之大笑仕候、四ツ過帰早速伏し

同十五日

雨模様、権蔵是より引移と届ニ来ル、十兵衛来ル、今日御目見有之候故五ツ半ニ過御殿へ出ル、御戻掛、御目見申上、主馬も出ル、明日立加藤甚大夫へ颯と書状認誂引取、柳原御長屋入、草蔵・小一郎と大働最中、火・湯無之、三内へ茶無心遣候処、三内も伊兵衛不居、二人(カ)大振り之土瓶ニ茶出し、茶椀六ツと大土瓶ニ湯入来ル、暮過れとも膳不出、三内より今日為御祝義酢(鮓)色々遣、空腹不打置食し、無間膳出候、巨燵(炬)掛久振ニてアタリ僧千金、雪降不申候得共風寒、綿入二ツニ綿入羽織ニて縮ミ居候、緩々尻ヲアフリ漸落付伏し、下屋御長屋物見下五六尺堰有之処、居候処堰無之窓下往来、其上カト成り、別て世話敷、肝ハ頭上ニ有之心持、疳気之有候者ハ油断ならぬ処ニ御座候、甚案事候事ハ御馬乗四郎右衛門疳之風ニて心配、殊ニ榊原内々示談いたし留、今去気之毒起りハ此方ニ借付金(ママ)七八百両も有之、催促いたし候へとも不返納候為、別て腹合ニ掛候由、乍去脇へハ御噺御無用、療中ニ御座候

同十六日

寝居候処へ権蔵只今非常詰之処と申来ル、其後起、仙大夫来ル、伊兵衛来ル、例刻御殿へ出ル、御用少々有之、主馬ハ他行ニて不出、御人数定り名前も権十郎殿内々見候様ニと被渡候、同役衆より不来、昼後引取直ニ御人数調ニて柳原へ参り、八ツ半過帰、為御登品々漸達

一、頭巾　一、籠手　一、股引　一、干飯入袋ニツ　此方是非とも無之不相済ニ付、持登候ニツヲ二ツ拵直相用居候、御組衆へも兎角世話焼居候
一、大小鯛十一枚　一、鮭二本

右之品々慥ニ相達、誠ニ御珍敷即焼候様申付ル、片身不残為切、外ハ先ツカメ為入候、小鯛五枚早速男四郎へ遣、今日終日御殿へ詰故返事不成、織人へ兎角用金借りルヤラ色々面倒頼故鮭四ツ一遣候処、鰹五本移とて遣、其内中恵来候間留候処、最早膳出ル頃丸子伊太郎来候間庄内地走早速出し大悦ニ御座候、私一同一切ツヽ、戴候、誠鮭風味忘居候処至極よく

御塩梅ニて来り、不思義浪人之口ニ不入、我口ニ入候事も偏ニ御恵之心歟届、結構至極と舌之抜ヲ不知頂戴仕候、塩塩梅丁度宜御座候、伊太郎大悦、大陶ニて七本余呑、大酔ニて吉原噺抔仕候て四ツ前帰、兎角香物抔持来呉候間ぢゝも明晩参候様ニと伝口申遣候

同十七日

天気寒風、三内へ寄、御殿へ出仕、御用も有之候得共寝なから勤居候、主馬も出ル、男四郎昨日礼呉々申上ニ、此度小鯛不被遣ニ付誠幸御珍敷趣御分申候間御歓也、織人も結構為礼来ル、昼過引、燵(炬脱ヵ)之有之処へ住居故鉄瓶無之、不都合ニ付、榊原・片岡誘行町廻いたし、数十軒店見候処、少能分有之ニ付壱ツ整、隼人ハ三ツ足整、下直ニとて大歓也、両国手前ニ来候処、凧絵屋店有之ニ付立寄、四枚絵二枚・二枚之絵二枚・一枚之絵三枚整、隼人ハ張凧五ツ整、土手通り戻、新橋ニて別れ帰、寒風之為難堪頭痛いたし候、丸子ちゝハ不来、御組集例之通茶出し候、帰候後早々伏し

同十八日

晴天、霜如雪、昨日より暖気之方

一、茶もなし

一、茶椀土瓶もなし

昨日半蔵へ折々慰候間茶人道具一通集候へと申付稽古可仕候、中恵へ稽古之節参候様ニと昨日申

一、仙大夫来ル即帰、三内来候間一趣御殿へ出ル、御用格別無之ニ付昼引取、調御用有之ニ付十兵衛連帰、宅ニて調、御備世話ヲ呼組合組せル、庄右衛門引込居候故筆頭脇権蔵来ル、丸子ちゞ大重箱ニ赤飯壱重・ミかん壱重持参、丸子吹イコ(鞴)祭とて参ル、入物借、ちゝヲ返し候、半蔵今日惣吉ニ炭取り、はひ(灰)ならし取ニ町へ出し、整来ル、三内より雑煮一蓋物遣し、ミかん移ニ遣候、調御用暮過迄掛麁飯出候、飯後伊兵衛来ル、四ツ過迄噺いたし帰

釜敷菓子箱ヲ返し

【第十五冊終わり】

【第十六冊】

「十六」(朱書)

十一月十九日

雨天、今日御飛脚立有之趣ニ付凧絵七枚つゝ四本箱入、外丸子より至来之蜜柑一曲物頼遣、例刻出仕、主馬は日々出候、御用大透と相成候得共、急速御人数掛故面倒之事斗有之、無文字書状任手認、大馬鹿書と可申、白井へも詰所ニて颯と礼一通認候て御小性方へ頼遣、昼過引取直ニ榊原

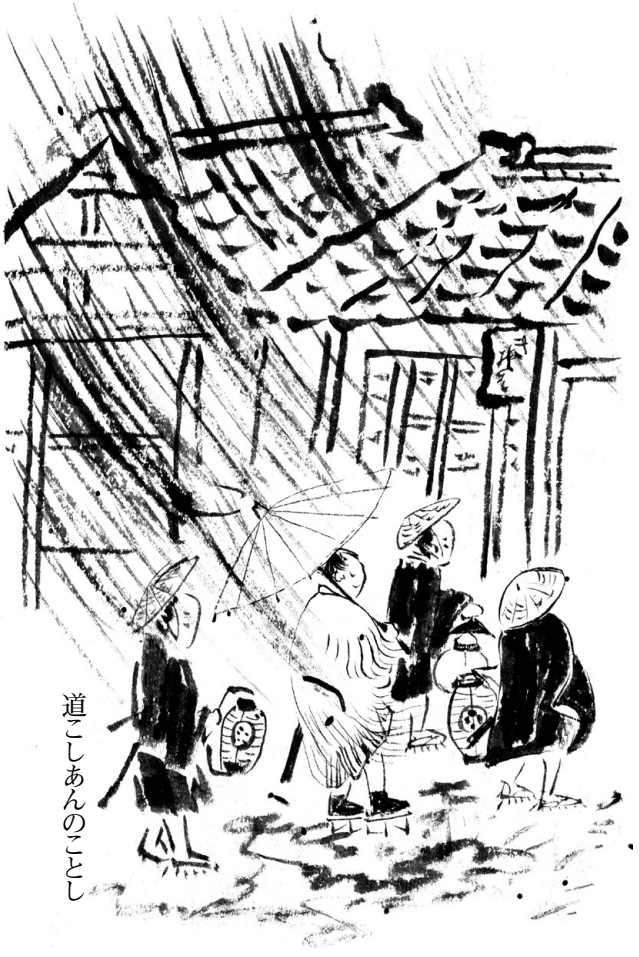
「十一月廿四日総之助下ニ付十二月十一日着十二日達」(朱書)

へ参候処、巨燵を掛置、湯は涌居不申ニ付、早々湯為掛候処へ隼人も御殿より引取、是も同しく弁当不食趣ニ付弁当開いたし、隼人弁当ハ味噌糟漬鮭・味噌漬之香物、私は例割合、さひ（茎）入ニは例煮豆・糟漬之香物いつれも出合、其外押入より引出候二蓋、一ツハツクタ煮小雑喉、一ツハ醤油実、ソン〳〵と食し、隼人申ハ今朝之地震余程強と申、我とんと不知、何時頃やと承候処五ツ半之由、雨々ハ次第〳〵ニ強風雨也、今日御用有之ニ付寅太へ相談不致ならなひと存居候処、幸隼人へ寅太致案内参候趣ニ付、相成丈早々参候様申遣候処、八ツ過ニ来り、色々示談いたし候処暮頃ニ相成、直ニ又々地走ニ相成、吸物ハ鳥、平ハ甘鯛と海老、ニラフサ、さし身、其外庄内産味噌糟漬、雨、登候後無之大雨、思止〳〵五ツ頃迄噺帰、挑灯為持、遣候迎合羽も不遣、何分子供集り、無拠蓑借り、半道余之処帰、其出立東都松田町辺も往来人無之、帰候処大汗、暖気ニて綿入一ツニてよし、雷鳴一声、認物いたし伏し、夜中目覚し小用行、大雨止、風ニ成り、星見へ、クハー〳〵と申音いたし、前舩ニて人々賑々敷舩より水カへ出候事夥々敷、川水たつ瀬也、洪水ニて若御長屋へ水つき候ハ、如何可致抔考中寝候て夢中

同廿日

晴天、朝道は乾、出腰下セツタチヤラメカシ奇妙也、金弥来ル、帰候後髪月代いたし、食事中藤助来ル、一趣御殿へ出ル、御用格別無之、主馬も出ル、宅ニて調御用有之ニ付御用番其趣申述引取、直ニ三内へ寄示談いたし帰、権蔵来ル、七ツ頃ニ大体調も出来候間昼寝いたし、暮前目覚し食事いたし、此頃ハ鰯相止、兎角土鰍之地走始り、又々認物いたし、気詰り候間薩摩芋取寄、輪切いたし自身網指し掛焼食し、当月九日立候御飛脚着、御用所より御書達

当九日立之御飛脚着、御書相達有難奉拝見候、追日寒気相増候節、益



道こしあんのことし

御機嫌能被遊御座候趣恐悦之至、奉恐賀候、私儀も大丈夫相勤居候間少も御懸念被成下間敷奉存候、先月廿三日さし上書状当五日榊原より御届申候由、陶山臼兵衛同日帰着ニ付誂候書状御届申候由、廿六日ニ立へ相誂候書状当□日相達、結構ニ被為蒙仰候ニ付、御隠殿へ御出恐悦被仰上候由、御繁用御察申上候、代一登候より御案事申上□（居カ）候、登候ハ、抱地御入無人ニて何とも御察奉申上候、来春ハ又定敷と存居候、近日中ニ又々御勤有之、追付四品ニ被為成候由、来春ハ又侍従之由ニ御座候、少将容易ニ無之物之よし、扨刀之事委細被仰下奉畏候得共、何分差料ニ相成候位ハ七八十両も不出ハ求候事不相成模様ニ御座候、源四郎も幸登居候間、幸能物出候節ハ求可申、乍去容易之事ハ無御座候、順策へ頼候脇さし出来候上、大幸便ニ為御登被下度候、追々浪人遠走り候由御座候間、道中懸念有之間敷、此節甲府ニ近詰候由、

国持大小名如寝体弱と申哉、又徳川之為ニハ力不用と申事哉、とんと奇妙た事ニ相成候、武田三十騎ニて敵国を通上洛いたし候事有之様書物ニて見候事有之様覚候、右之武田も八百人ニて妻子連上洛いたし可申、京都ニ一橋へ付登候天狗組御暇出、千人斗京寺院哉又は長家へ入居候て、近々ニ騒動出来可申と噂粗承候、兵庫へも交易場近キ被開候由、いつれ又々天誅起り可申と被考候、爰許ハ先ツ捕者等も遠サカリ、静よふニ御座候得共、何時何初り候も難斗候得共、矢張庄内居候同様の腹ニハ油断ハ不相成、此方之楽ハ尓今知不申、甘物ハ兎角薩摩芋のみ給居候、朝長寝いたし、起候哉否人ニ被掛仕、五ツ半ニは出仕、短日ニて御殿へ参と無間昼ニ相成、毎日八ツ頃引取、日々隼人ニ寄湯漬食し帰候と七ツ過帰、人ニ被掛仕亭主茶屋同様、是も御勤と存居候、庄内ヲ思出候事無之、毎日之御殿詰之往来ニて日葉(暮)し居候、御用ハとんと無御座候様ニ相成候

母様御書被成下難有奉拝見候、御機嫌能御暮し被遊、恐悦之至奉存候、段々被　仰下候趣一々奉畏(カ)候、日本橋名物玉屋両品上可申、何廉折々上度候得共世話敷取紛、心之侭ニも任兼居候、御歳暮何廉上度と存居候得共、心当りも無御座候、白井祖母さまよりも細々との御文被下候へとも、兎角乍思御申訳なき御無音ニ打過、入恐候斗ニ御座候、御序宜奉願上候、鮭赤川ニて取れ候由ニて沢山御登せ被下、其外小鯛いつれも上々塩梅、能鮭之為ニ哉甘給候、小鯛珍敷、委細被仰下候間、男四ニ世話ニ相成居候間、着候哉否五枚遣候処、上ニハ不参ニ付さし上候処、殊之外御歓とて、厚く礼申述候、一枚丸子伊太郎参候節兎角色々貰、地走いたし候事も無之、幸ニ相達候節故振舞候間、外一枚残し置、給ろふ〳〵と思居候内、隼人へ参候節、此頃十兵衛上り之節御地走相成候鮭至極能御塩梅之由申聞候抔申ニ付、御珍敷有之間敷と存、不懸御目候得共、御分ヶ可申返事いたし帰、可遣と半蔵へ申付候処、大小鯛壱枚残置候、折角給候様ニと為御登被下候御厚思召、一枚も不給も甚不本意と存候得共、日々榊原へ参り地走来り礼を込メ、大小鯛壱枚、鮭少々遣候、御殿ニて御塩梅勝て結構なり、大小鯛ハ　上ニて男四郎殿より上候処、大歓ニて日々被召上、尓今無之やと金井迄御無心出候間、兼て御噺壱枚御残被置候分我へ被送候由ニ付、御貰申候壱枚又々差上候と申事ニて、段々承候処、上ニて六枚被召上候由御座候、於私大慶仕候、偏ニ御塩梅能故と奉存候、君御心叶、甘く御食事被遊候ハヽ、私も甘食仕候同前ニ御座候、鮭は日々給居候

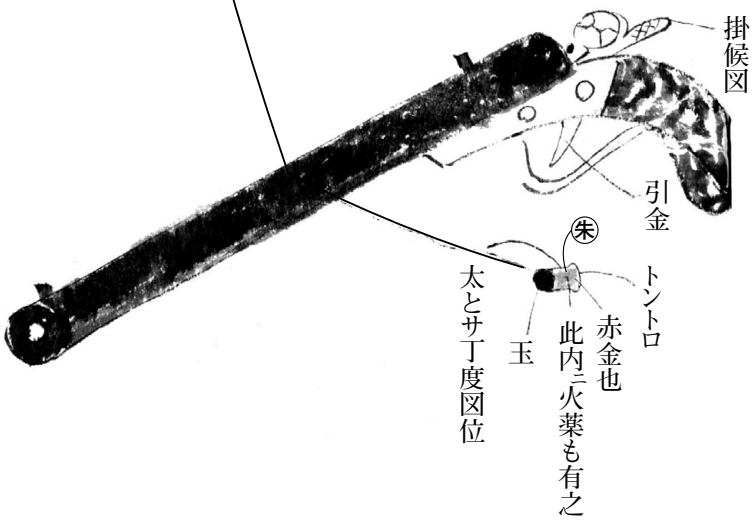
右は両御書之御答迄奉申上候

其外御母上様よりの御徒へ登へ入御文も奉拝見候

同廿一日

雨天、早朝丸子伊太郎来り、昨日横濱より珍敷短筒参候と持来、筒之長サ七寸位、穴ハ五ふん位之玉目也、異国ニては小鳥を打候趣、元込也、五六間位庭抔へ雀抔打慰筒之由、追日珍敷品横濱より□(相カ)越、其内伊三郎・

藤介・権蔵来ル、伊太郎申候ハ　殿様御若ク被為在候間御庭ニて御慰被遊候ハヽ至極御宜可有御座候ニ付、若々思召ニ相叶候ハヽ差上申度候間、宜御噺被下度旨申聞候間、いつれ押付殿出候間可懸御目と挨拶いたし候、無間丸子帰、皆々色々捻り廻し試、至極面白誠慰候内、イロリニ玉落し、アクとふし抔騒候内、トンと発し皆々大笑ひ、大おほけ、アク散乱、炭同様、棚之上ニ紙抔上置候処火飛燃、アク皆々アキ抔いたし帰(カ)、御殿へ持参、権十郎殿へ　上ニて若思召ニ叶候ハヽ、さし上度と丸子申聞候、乍去御庭ニてむしよふニ御打被遊候てはけんのんニ御座候間、宜敷と被思候ハヽ、御上可被下申述候処、御次之面々へ能々申付候ハヽ、可宜、いつれ是よりと被申候



今日より主馬私と隔日ニ日々壱人ツヽ、詰候事ニいたし、明廿二日昼御徒御覧被　仰出候、引取十兵衛用事有之、榊原へ参り、帰ニ権十郎殿へ用事有之寄、色々雑話いたし、主馬困タ風聞有之趣被申候間大笑いたし、先刻短筒上ニて思召叶、近日中本所ニて御打被遊候由、御居間ニては不被為打事被致候趣被申候、引取、雨道中難義帰、白井弟二来ル、岡吉久留守居中ニ右馬之助来候て数之子宮笥□之趣也(唾)振ニて来、尻之辺ニ種物出候由、ヒセンハ少々快塩梅也、尻之辺へヒセ(皮癬)ンノカタマリ出候よし風聞と言、種物と申候、心配ニ付附人閑兵衛弟子之内熊蔵附候積ニいたし候、暮過帰、御組集夜ニ付追々出懸、人々前ニて夜事いたし、五ツ半過皆々帰、早速床延伏し

同廿二日

雨天、三内来ル、文蔵来ル、例刻出仕、今日御徒御覧、明日金弥・仙大夫へ大目付被遣候間夫々申達御預人之金子　九ツ半頃非常詰所稽古所ニて粉失故之事

槍術御覧被遊候、七ツ頃相済、右馬之助被出召之御礼出不申ニ付御用番へ出、榊原へ寄、四郎右衛門弥六ヶ敷病症ニ付明後日差下候事ニ取極候由、早速帰暮頃也、調御用有之ニ付伊兵衛呼為手伝、九ツ頃迄掛草案出来、天気晴、伏し、先刻結城鎚之助明後立とて来ル

同廿三日

早天吉原之方出火チャン〃〃〃也、風強し、兵介・虎七・楯六来ル、半蔵甘豆納・花火せん香・おてつ取ニ出懸ヶ帰、つくた煮三、曲物も持参、大好物故其内半蔵一ツ、食料一ツ、一ツは明便ニ上ル、余り気詰り故昼寝いたし、伊三郎来ル、半蔵申聞候ハヽ誰と申者ニ書不被遣、御一同様御機嫌趣、神屋より味噌糟漬一同へ遣候由也、

今日は冬至趣ニ御座候得共とんと庄内十月頃之模様、風ハ甚サムケ(ママ)御座候、寒入来月相成頃御座候哉考へ候へハ、最早当年も三十五六日程ニて相成候、追々人々も下候、此方宜御座候得共、少後先ハ大雪ニ可有御座候、先々寒気御伺奉申上候、尚奉期幸喜之時候、以上

十一月廿三日焼(暁)認　　松平造酒助

【第十六冊終わり】

【第一七冊】

(朱書)「十七」

(朱書)「十二月九日立廿日夜着同廿一日達候別書状不参候」

十二月四日

天気よし、明日久嶋玄海出立之趣ニ付書状誂、八ツ頃隼人他行いたし候とて寄、実は三内物好沙汰を聞目利ニ来り、少噺いたし候、半兵衛も来り、直ニ三内長屋一同参り色々道具を見、皆々又我御長屋ニ来り麁酒飯を出し、小鯛皿ニ付、黒こゝと大根之煮漬、一皿ニ鱣百五十疋分、吸物はとふふニはんへん、三内菓子一箱持参故直ニ出し候、隼人・半兵衛ハ五ツ頃帰、其後伊兵衛も来り、三内父子四ツ過帰、其後調物いたし伏し

同五日

大雨風強し、例刻出仕、雷風雨道大難義、松田丁辺より雨小晴ニ相成、神田橋辺□□雨雲吹去天気ニ相成、泥はこしあん之ことし、御用は大透、調御用は尓今有之、織人と詰所ニ参り、今日幸雁脇方より飛来候間、隙ならハ参呉候様折角案内、若御出ならハ榊原父子と多門も呼候趣ニ付、参候事いたし、隼人ニ引取寄、土産一趣いたし呉候様頼、七ツ過より石原御長屋ニ参り、雁吸物ニ山□ヒ大根之煮漬一砂鉢・さし身一砂鉢・我、隼人との土産は玉子焼一砂鉢之地走、辻庄一郎参候処留、五ツ過迄噺いたし、我斗柳原故帰、大風晴、夜ニ内へ参候事ニ約速いたし置候ニ付寄、庄右衛門・正五郎・鍋之助も来り居、其内チヤンそら火事、今夜火事大変と為見候哉又走り出候得共、風強く火不見、其内火之見より小石川と申注進ニ付、風も能、御城之方ニも無之休心いたし、少過鎮火申注進、九ツ過迄噺いたし帰、伏

同六日

晴天、風不止、飯前より御組ニ被掛仕、ホート稽古皆々御玄関参ル、先落付食事いたし、丸子のぢゝ参り早速帰、我も稽古所ニ出、三内世話やきたて不成、昼過迄稽古して人々御長屋ニ帰、毎夜夜詰ホロケ眼ニ相成候間、食事後昼寝いたし、暮々迄前後不知、夜食出候趣ニ付起、其内御組寄合とて追々集、都合九人参り、例薩摩芋焼出し、四ツ頃迄噺し一同帰

一、御組集て無文字噺候得共徒然之夜は至極面白し、其噺ハ〇最早大黒之歳夜も参候得共米炒も不被給、此江戸ハ歳夜ニ如何いたし候半、大黒歳夜不祭、甲子ヲ祭候よし也、押付正月参候得共此方ニ居候てはかけ取ニ向われ候思無之てよし、年頭之客対□□かゝともへ江戸表より

御便り噺有之、御健御丈夫ニ可有之、客殿申候へハ時々便も有之、至て丈夫と申越候抔と口つかひ可申、最早寒気見舞、□類廻り(ママ)ハ此方は三日置市中廻り、寒入とも不思此頃の大荒ニ、西北ニ見ル小山雪少おり候、とふてさむき風抔其内来年下候節ハ本道可然、会津通ハ無際限山ニてあき候、狩川より西之方見候ハ、噺々抔の長夜も四ツ頃迄雑談いたし帰りぬ、チヤン始り遠方ニ哉人も不騒

同七日

日和暖気、平五郎参り、丸子亥太郎参り英国小筒十挺持参、一挺十九両ツヽ、長持入ニいたし御上屋敷へ遣、例刻出仕、御用透候得共調御用手間取、鉄炮不残御買上ニ相成候、引取より兵部殿へ参御用済帰、夜食後岡吉来ル早速帰、三内へ噺ニ参り九ツ過迄居帰、色々認物いたし伏し

同八日

快晴、今日は寒入、都は暖気ニて巨燵も不掛、庄右衛門・権蔵・儀右衛門・金弥・六兵衛・伊三郎来ル、早速帰、十兵衛・小六来ル早速帰、十兵衛昨日より参候積故日本橋辺之海老マシリノ雑喉を朝ニ三平ニ買遣、五分位候間汁いたし振舞、十兵衛昼過帰、今日神田橋ニ為見馬参候趣ニ付出掛候、昼頃風追々強、寒入印ニ耳も鼻も以テヌカレルよふニ覚候、八ツ過より益寒、格別〳〵と馬場参候処、権十郎殿・隼人・多門・百度其外御馬乗等大勢居、我遅刻参候故源五兵衛忰、馬ニて我へ迎ニ為走、松田町ニて逢候故此寒風ニ待被居候を謝し候、青毛三疋、鹿毛都合四疋いつれも心ニ不叶、鹿毛南部出ニて八キ有之、至て無意なれとも皆々ニ被進候大馬ニて、当五歳珍敷大馬也、末廣よふの馬を心懸候得共尓今目懸不申、竹内此頃大勢と一趣賀(神)奈川へ遠乗、馬はツフレ尻をムクリ、朝田之馬を貸候て四ツニも帰候哉、其口説奇妙ニ御座候、一同ニ大慰被致候由、五十両も御国ニて出候由、六里位参候てツフル候位馬ニては役ニは不立候、権十郎殿寄暮頃迄居帰、暮ニ相成寒気弥増、六ツ頃御長屋へ帰、金弥来り早速帰候

十二月八日八ツ前新橋渡冨(ママ)山ヨリ吹寒風耳鼻切レ如飛、近山白絶景

詩哥不出来武風流

今日調書権十郎殿不残出候て緩々いたし候、寒中御機嫌伺書認んと存候処、亥(伊)太郎参り粕(舶)来短筒二十三両とて持参、只今迄三内殿へ居候得共酒も不出、喉乾候とて色々噺いたし、湯豆腐ニ串貝味噌漬出し候、酒壱升位も呑、四ツ過ニ漸帰ぬ、今夜風止一天ニ雲なし、誠ニ珍敷夜なり、寒気見舞状認ル

【第十七冊終わり】

【第一八冊】

「十八」(朱書)

「十二月十五日早追田中弥太郎廿一日着」(朱書)

極月十二日

日々快晴、朝世話来ル、当御屋敷御玄関前ニてホート砲稽古有之ニ付出ル、昼頃相止、食事いたし候、明日山岸寅太出立之趣ニ付無事のみ颯と書状認、今日為見馬参候趣ニ付昼過より御上屋鋪へ参り、寅太寄候処荷物箇ニて大取込故、向御長屋俣野市郎右衛門居候故其座敷へ参り、御備組立之義、且此度野州浮浪人とも美濃迄へ何の障も無之、妻子連、大砲兵粮迄持、国々通行いたし、適々固人数出候とても戦勢壱人も無之、辻堅同様道開通し、宿々申ニ不及、無滞事ハ浪人〳〵とて一同恐、尤駄賃等過分ニ遣候由、信州ニて誰殿御勢と夜戦ニ及候節ハ防方ニは荻野流種ヶ嶌之鉄砲火縄打故消候哉、又は縄ホサケ、闇夜ニ火縄之火見当ニ被打、浪人方ハ西洋之トントロ管ニて打候事故消と申事ニも無之、火も不見、信州大敗軍と相成候由、西洋流ニ無之ハ不済世之中と相成候故、十蔵殿へ委細申述、第一男子ニ三男之組分いたし、来春不残交代、西洋砲術を御国ニて益相開候調書差出候様呉々申含、尚追々心付候処申遣候事ニ議し、折角□□□れ市郎右衛門と噺候処、昨日小林登之助門弟取扱当分被仰付候趣申聞候、御小性頭より被達候故不知、先達てより被仰付候事ハ覚居候、小林門弟之廻り先、昨夜中間体之者より大石五六ツ投ラレ、内クロホシニ中リ気絶いたし、医者を遣抔大騒いたし候とて大口説噺也、是迄市中廻りニて数十人召捕候得共、ヶ様事ハ今日初てなりとて大笑いたし中間体者をハ縄を掛引来候由、夫より隼人へ参リ、源五兵衛を呼、馬参次第早速為知候様申含、夫より大砲小砲玉拵場所ニ参り、さし渡一尺位先として色々不残三百位之玉数之由、夫より馬場へ参り隼人・男四郎・兵部殿・市郎右衛門・十兵衛大勢来ル、手馬も率行候間、馬七為乗見候処、大違丈夫ニ相成候て、はやミも余程のれ候得共、右強、右□不致ハ不被乗、其内為見馬二疋来、いつれも青毛、二疋とも入気不申、暮頃栗毛を乗柳原迄一飛いたし候、暮過帰、食事いたし、三内長屋へ参り枝柿地走有之、色々の甘物出し、九ツ過帰伏し

同十三日

誠日本晴、暖気、東六・又右衛門参り、例刻出仕、色々御用申述八ツ過引、直ニ榊原ニ寄、割合開玉子之ふわ〳〵出し、夫より玉拵場ニ参り西洋之足並五六人為致、夫より三内と壱趣ニ日本橋通りより帰、暮過食事いたし、馬七菓子箱持参、三内来ル、九ツ頃迄噺いたし帰、伏し八ツ過チヤンチヤヾヾヾヾヾ馬クハタ〳〵〳〵ハヨー騒々敷故見候処、戌亥之方也、牛込通と申、火之子飛上ル、寒故伏し、一寝いたし候処余りニ騒々敷目覚又見候所、盛ニ燃居明々也、又々伏し

同十四日

毎日珍敷天気、塵如雲飛、御奉書ニ付今日五ツ時御登城、御縁組御願之通ニ被為蒙仰候由ニ付、殿中無地熨斗着用と昨日申来ニ付、夫々着服為出支度、世話不残来り、例刻出仕、御願之通被為蒙　仰候趣、御戻御居間ニて御祝義申上候、御酒御吸物被下、皿マクロ・皿蛸足・御吸物スヾミ・折鯣、御礼御用所申述八ツ過引、兵部殿へ参り、隼人へ寄、又三内と壱趣町を廻り帰、寒風難堪、今日兵部殿より弥越中嶌ニてホート寄合組へ為御打相成候間申達へく旨御沙汰ニ付申達、尤当廿二日三日両日之内と御願立ニ相成候由、半蔵竹之すき櫛二ツ整来ル、鏡ハ追てと申聞候、両日続引取より本丁通り賑々敷大店望歩行候得共面白物壱ツも無之、ハンコイ板等いくらも有之候得共、いつれも置絵いたし絵を書候分悪敷候、ヒントロ斗たく山ニ有之候

御門之向ヒニ軒目之舩宿ニ曲者有之と兼て聞しニ初て見ル、両人居候由なれとも壱人ならて不見、黒羅紗之羽織当時流行縞縮緬之前たれニ縮緬小紋形黒八丈之建縞、顔ハ十人並と可申、唯曲者之風俗也

【第十八冊終わり】

【第一九冊】

「（朱書）十九」

「（朱書）十二月五日玄海便廿三日着、廿四日達」

同廿四日

晴天、昨夜出火水野和泉守様小屋ニて西丸下故　上ニて御出馬、神田橋大騒いたし候由初て承ル、中嶋仙大夫使、山本権蔵・三好金弥之使・寺内権蔵来、口書と差扣書付差出し、山本ハ御上屋敷住居候処、仙大夫へ手伝来り、朝飯不給趣故麁飯出し候、伊三郎・又右衛門来ル、例刻前神田橋へ参り、直ニ権十郎殿御長屋出、差扣書出し、口書内不宜処有之ニ付委細申述、御殿へ相詰、御用少有之、引取直ニ榊原へ参り、雑喉汁之趣向始帰、三内来ル、作弥より書状達居、認物いたし伏し

同廿五日

日々晴天、伊三郎呼色々御用達、伊兵衛来ル、三内へ寄、主馬事示談して本所へ伊兵衛誘引行参候処、兵部殿・隼人参居、若者ともハ皆々雑喉すきニ参候由、余り能天気故四人連ニて五百羅伽（羅漢）見物ニ出懸、大地震後覆修不致趣ニて大破也、こふの鳥の古巣有之、かふの鳥ニ羽居、五百らかんを廻り十二銭被取帰、十兵衛・仲蔵・弥吾・甫七・嘉大夫大不勝負ニて帰、多門昼後より馬ニて馳来ル、男四は御用有之不来、酒出し、吸物・芋子・大根・にし也、其外肴はさし身と煮肴、鯰かは焼、其後雑喉汁出、八ツ過空腹なり飯給賑々敷、七ツ過帰、権蔵只今廻ニて帰候処なり、両国脇ニて酢（鮓）店前通り廻候処、若々と後より町人参り、只今侍三人酢食代と申候処走り行、追付代銭と申処、我等々ハ（ママ）酢食人ニハ無之人違、いつれ屋敷連不行ハならなひ被申、是非御助と申ニ付、後へ戻り掛合候処全間違と申ニ付、酢店亭主詫サセ事済帰、馬鹿〳〵敷目ニ逢と大口説なり、半蔵ヲ呼、毎日着候紋付垢付裾切れ候間、廿八日之便へ差下、洗たく出来次第早々為御登様ニと可申遣候、尤羽織ノゆきより二分五りん位ツヽ、出居候間少ツメ仕立候様ニ可申遣候と申付ル

尚寸尺ハ定置候半と存

候間入念拵可遣候、縞之

着服下着ヒコミ、上着

出、羽織は又ヒコミ、田

舎男ハ別てかゝとの為

田舎者見候、草臥伏し

二分五厘位出ル

同廿六日

晴天、伊兵衛来ル、三内へ寄、寄合組分大体出来ル、例刻神田橋へ参り御用少々有之、引取直ニ榊原へ参り書状颯と認、無事のみ申上ル、今日は兼て四郎右衛門見付置候南部出青毛之馬為見ニ甫七の先生惣吉率来ル、足とりハ宜敷候得共、口合以之外六ヶ敷、目ハ折々白目斗出候様見

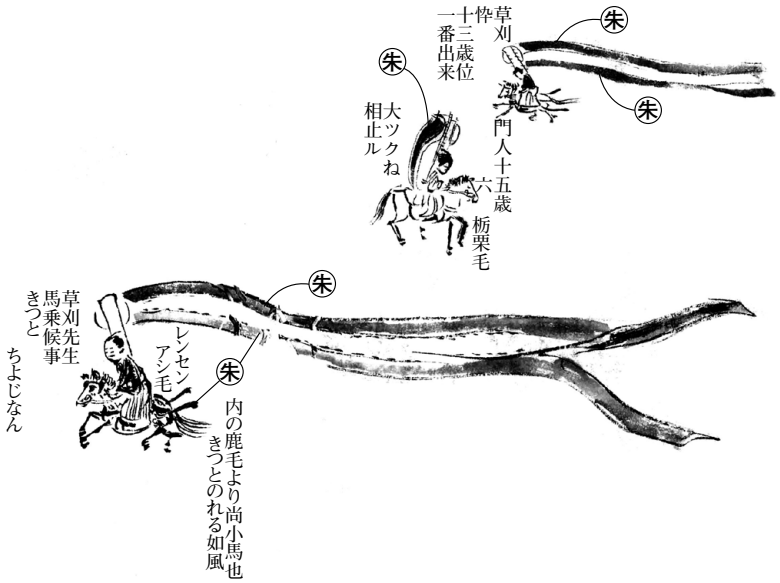
へ、気向悪敷と見受候間、二度ハ見候ニ不及故御返し、先達てより楽居候処無張合、先ツ当でも無之忙然タリ、暮頃戻り、少々雨、挑灯ニて迎ニ逢帰、食事後御組集候積之処不参、三内へ用向ニて参り、五ツ過御組集、九ツ過迄噺いたし一同帰ル、色々認物いたし七ツ過伏し

同廿七日

晴天、三内来ル、調御用大体出来候ニ付詰日ニ無之候得共例刻出仕、主馬又他行、伺書等不残出し、達方兵部殿へ催促いたし、御小性頭と色々示談候、八ツ過御家老衆被引候故引取可申と存候処、榊原より参呉候様申越候ニ付寄、〇湯涌居候故割合食し、殿様之御乳ニ漬候南蛮ヒシヲ出し此御乳々ハ榊原出入いたし候者之かゝ故時々送り候由道具屋二人参り賑々敷、七ツ過ニ帰、日々取込ハ先日申上候、急速御人数出候節調取扱被仰付、政右衛門大体出来、なし下候得共、此度二十人為御登御人数と、此方ニ居候五十人余と御備組と三ツニ分、平日は非常詰・市中廻・忍御供、急速之節大炮組ニて出候事、尤西洋大炮ホート為御打、其稽古立方、且是迄寄合組とて頭も無之処、松宮源大夫と榊原十兵衛へ在勤中御預ヶ、私一人ニて行届兼候趣色々申述、御小性頭之内壱人被仰付候様ニと申述候得共、馬之耳風、尓今不被仰付、主馬隔日番ニも不出、御小性頭頼兎角出懸、小増(僧)大働、主馬出席無之、面倒ニ無之却てよし、此頃御小性頭衆筒役御他行度々、後御頼(カ)候、並御家中とても月ニ六度ならて出来ぬ事を余り無際限候故御心付候方と申事候得共、とても小増抔ニては不埒明故、内々三内へ申含候、先達てより度々三内掛候、大御目付感心ニ厚意ニ諫言御座候、十蔵殿御国ニて嘸々心配被致候半、三内と逢候度々噺いたし居候、寺内権蔵より(の身)塩蔵庄内より参候とて至来、汁みニ半蔵も困候哉即席汁出来、甚コハキ事也、暮過より御組今宵も来ル、権蔵一重持参、別て賑々敷九ツ頃迄噺帰、今宵早速伏し

同廿八日

晴天、伊兵衛・十兵衛・丸子ぢゝ参り、例刻過出仕、伺色々有之、男四郎詰所へ参り御内々御噺ハ、今日草刈と申浪人ニて大馬くろふ(馬喰)参候て絹引御覧御内々被仰出候間、押付頭取出申候得共、万一御肩衣等御持参ニ無之哉も難斗候間、御心付申との事故、厚意段謝し、兼て筆役居候所へ入置候間、不都合無之返事いたし、昼過主馬も御内々見物被仰付候ニ付出ル、今度急速御人数御差出候節、竹内は一ノ手被　仰付候、私ハ二ノ手と被　仰付候、最早御召替来らん(カ)とする処へ御留守居中役陽三郎出、只今松平右京亮様御家来参り、申聞候ハヽ、只今三河町通候処、大乱妨人二十人程居、酒屋をこわし候最中、大騒動故御注進申と参候と申聞候間、彼是いたし居候内ニ内参り、右京亮様御家来と御内玄関前ニて逢、段々承候処、不易容騒之趣と申ニ付、直ニ権十郎殿へ委曲申述候所、早々御物頭二組、外御備御人数差出候様被御申聞候間、早速申達、御物頭抔直ニ出候とて届ニ出ル、ソラ〳〵〳〵と申所へ陽三郎又々参り申聞候ハ、私共より為見ニ遣候処、三人程酒酔高声出候処、町役人とも先方へ運行(運)候由尤中間体之者之由馬鹿〳〵敷事ニ逢候とて皆々大あきれ、夫々出不申様ニと達、御召替も参り、御次より御庭ニ出、御馬見所へ参り候得共見悪候間、御用人抔外へ出ル、先生之草刈とやら肩衣掛、一ニ栗毛、二ニれんせんあし毛、三ニ鹿毛、乗馬門人之内より栗毛ニて絹を引、□〳〵土ニ付、二ニ悴之由、十三歳位ニてレンセンニて引、二三度能引、三番門人之内十五六才ニて栃栗毛ニて引、一辺ニて相止ル、四番栗毛ニ乗出ル、是又門人、五番大先生れんせんニてニて(衍)出ル、矢張土ニ付、是切之所、男四郎之馬月毛、草刈先生ニ御馬乗□、我手ニ不及故為乗見候趣、能馬きつと走り候、とても常木抔の及所ニ無之、相済引、御庭ニ寄、鴨御取被遊候間、御泉水ニ網を御張被成候故、御家老衆・私ともと男四郎願拝



都合馬四疋来
栗毛門人之内両人引
レンセン先生之親子引
鹿毛絹ハ不引
栃栗毛一向の馬ニてツクねル

二疋ハ如風、乍去内之月毛抔ハ並候事不相成馬也、月毛当時百五十両位も可致、すみ〳〵ハ絹土ニ付、十三位之悴斗
三度位能出来ル

レンセンアシ毛惣身ニ団子形有之、
初テヶ様ノ馬見タリ、誠小の馬也

見いたし、夫々御意皆々出候故、御ハシカシ敷御模様候得共、鴨御取被遊候御噺、御泉水之中ニ鴨掛候節、如何被遊候哉伺候処、御庭方を入候、松弥抔も入候事も有之、向之泉水ニ今鴨居候間、取ルと御意ニて網を御肩御掛、陰之方ニ御廻り被遊候ニ付、平伏して詰所へ引、不都合之為割合不給候故榊原へ寄、湯漬食し、暮過ニ相成候間早々戻り、六ツ過帰、又食事いたし、今宵地走ハ昨夜石原源四郎より鮭味噌糟貰候間為焼給、風味よし、明日ハ弥惣御備へ達候故尚三内へ参り、色々示談有之故常之着物へ大小さし参り、九ツ頃迄巨燵入長噺、甘物無之とて伊兵衛混(昆)布焼、世中之噺いたし帰

同廿九日

天気能し、又右衛門・庄右衛門参り、例刻出仕、七八十人御備組待遠之顔色ニて居候、そら達さしとする処、隼人達面異存出来大不都合、人々を八過迄置候故空腹ニ相成、帰候て暮頃参ル抔、我ニ聞候様高声立尤也、源大夫・十兵衛御用所へ同道組々の名前被渡、今度御預被仰付候被達候故、御請いたし引、夫より一同へ達、先ツ私之心通りニ相成、目出たし〳〵、今度ハ一同西洋の大炮ニ相掛候心組ニて、今日も御趣意之趣ニて申達、明日よりも稽古相始候由、我も不掛ハ一同引立候事六ヶ敷故、ボート炮柳原ノ御内玄関之内居置(据)、稽古仕候心組、如何可相成哉、作弥上候ハヽ此頃御返事いたし候処候得共、竹林も例之後手気発し、大馬鹿ニ相成居候間、遠察いたし呉候様御伝言可被成下候、諸士と同しニ空腹難堪候得共、一同同様之事故、八ツ過引取、御長屋ニ帰、湯掛飯食し、香物ニて鱈汁給候より却て甘く食し、夫より又々達落を調、其内人々ニ被掛仕大繁多、此頃中夜詰いたし候間床□為延伏し

同晦日

天気よし、今日は二十七回御忌膳出候、平ハ(ヤキフ)(コンニャク)(ニンシン)(キノコ)(イモ)さく平と可申、汁塩蔵(トウフ)塩ウトン誠御丁寧御地走ニ相成、御法事之印仕候、隣之三内長屋ニ参り色々示談いたし、昼後十兵衛・小六来り暮頃帰、暮頃伊兵衛来ル、帰七も参ル、湯大根之吸物へ両人へ鮭味噌糟漬付、酒出し、久振ニて賑々敷、大笑いたし候事ハ、此頃参候絹引之大馬喰草刈より御馬乗一同案内貰ひ、三日ニ朝よりと申案内よし、草刈角力すきニて二段位取候者故、朝より昼迄馬為見、昼より大角力集為見候由、其後嘸柳橋へ連れ可申、萬一連られ候ては多分の入費掛り可申との口説ニて大笑いたし、其外かゝ程めこき者なし抔弁し、伊兵衛・私ハ腹をより申候、五ツ過迄居、帰七御上屋敷へ戻り、伊兵衛も帰ル

十二月朔日

夜中より雨天、床中ニて色々考、庄内羽黒山之ほら貝も声候得共、此方あし駄之音と雨之音、扨々御上屋敷迄半道余之往来とすむ〳〵起、人々ニ被参、例刻出仕、上下着替、色々御用を達、大炮打大気込、明後三日ニは江川ニ参ルとやら、そら廻り相止呉れとやら大勢ひ也、此造酒助掛候得共、余りはまり被過候ては後は困タト深心配いたし候得共、乍去無拠と其内御戻り御通ニ出居、御通後御次御目見申上、其後引取、直ニ榊原へ寄、食事いたし候、政右衛門跡役壱人ニては大閉口、達方も大不行届、兵部殿へ御小性頭より壱人出呉候様呉々申述候得共、壱人ニて可然、若貴様ニて不行届は拙者之不行届抔太キ口きゝ居候、誠ニアキレタ兵部殿先生也と色々大口説いたし、隼人申ハ我役所ニても外ニハ不見、心付候処無腹臓(蔵)申候間、余り口説不申ニ、萬一之節ハ不都合ニ無之様にと心付申候抔、色々厚意申聞候、御達御殿ニて見候事も不相成、榊原御長屋ニて颯と拝し候、御一同御健恐悦〳〵、先達て軍艦へ参候趣向之節、土産之積ニてカステーラ四箱調置候得共、余り時節遅(オクレ)ニも相成候間、来春之事ニいたし候故不用ニ相成候間、兵部殿一箱、権十郎殿一箱、私一箱、外一箱皆々分候積ニいたし一箱持帰、大雨なり道中大難義也、只今持帰候箱ハ御歳暮ニさし上、名下色々書付整早速差下度候得共、三日ニ御□御下候とても間ニ合兼、追て他行之節と先ツ相止候、暮過し三内へ噺ニ参り、扨此度一同へ西洋大砲執行(修行)候様達候所、案外ニ気込も能、大体趣向通りニ行、実ニ時節至来と可申、此度之儀は寅太と半分ニ分、我ハ組を分、大炮を仕込□□、寅太ハ庄國へ下候ても組合不崩、行々一組熟和いたし、下候て又登之節ハ其組〳〵と定置候事を取調と約速いたし、我持前を先ツやらかし仕舞候、後□ハ甚六ヶ敷候事、御備登十之内七八□出来候得共、竹内御組ハ掛申間敷、是迄掛心の無之人々を申含候事抔噺、九ツ過帰伏し

同二日

雨天、金弥出勤いたし来即帰、十兵衛来ル、昼飯出し、調物壱人ニては不明埒、三内呼手伝いたし貰、十兵衛ハ初て始り候頭故伺ヶ条思出し案し出片脇ニて認、暮前出来帰、暮過より御組寄合ニて来ル、世話役斗也、幸ニ付西洋大砲ニ掛候様申含、一同承知いたし、明日よりも掛候積、先ツ三内へ参候抔大勢ひ、竹内組は掛申間敷候得共、外不残大息込、此図はじさし掛候様申聞セ、四ツ過帰、何分大敵何時出候も難斗世中、頭弁器存なから不掛ハ不相済と色々再三考達やら、申諭やらいたし候處、外案ニ気向能大悦不斜、蔭ニては口説人も有之候半、先ツいつ方ニても早く覚〳〵と斗ニて口説噺ハ聞へ不申、床延し伏し

同三日

天気よし、儀右衛門・又右衛門来ル、例刻出仕、御用格分無之、昼後新徴組先日暮ニ掛り御延ニ相成候ニ付、主馬・私も出ル、七ツ過済、兵部殿御長屋へ参り御用済、榊原へ寄、漸昼飯給、暮過引取、御用有之三内へ寄、カステーラ隼人一焼取、不用分三内入用と申ニ付持参故三内へ遣候、権蔵来ル、藤蔵も来候得共早速帰、色々噺いたし九ツ過迄居、先刻カステーラ開キ候方可然と、私と三内・伊兵衛・権蔵と四人ニて切り食し、其体大笑後々迄在勤之節三内長屋ニてカステーラ喰候事有之噺実也と、一焼四ツニ分、壱人前壱朱余ツヽ、茶を呑、こん布食し、むせふ〳〵漸食、大笑いたし、九ツ過帰早速伏し

同四日

天気よし、十兵衛・金弥・庄右衛門・権蔵・伊兵衛・六兵衛・儀右衛門・伊三郎・小六・順吉・市兵衛来ル、昼頃迄居一同帰、又々鬱陶敷天気ニ相成、(ママ)を此控を御覧無事御察可被下候、先々折角寒気御厭可被遊、御機嫌伺のみ奉申上候、以上

十二月四日　松平造酒助

御父上様

御母上様

尚々明日玄海下ニ付、誂へ差下候

【第十九冊終わり】

【第二十冊】

(朱書)「二十」(朱書)「十二月十三日寅太便廿八日達候」

十二月九日

天気日本晴、丸子ぢゝ参、カラヘン筒熨斗付さし出、厚意之段謝し、馬上ニて打候鉄砲之尤半手打、筒之長サ二尺位、肩より革ニて掛置物長サ三尺位、伊三郎・伊兵衛来ル、例刻出仕、引取、三内へ鳥度参り帰候処、豆腐てん楽儀右衛門・金弥調物手伝来ル、米イリ注皆々帰、早速伏し

同十日

昨日氷、当冬一番氷、手洗水氷

日々日和、庄右衛門・三内来ル、ホートノ稽

昼トロロ飯故権三郎呼振舞、昼飯六はい給候と

得共、進メ候所大なら茶椀ニて五杯給、御組第一大

由、都合十壱杯也、其後早速帰、十兵衛来ル、夜食後

三内へ噺ニ参り、九ツ過迄居、早速伏し

同十一日

日々晴天、又右衛門・東六参り、例刻出仕、八ツ頃帰、十兵衛来ル、兵蔵来ル、追々源大夫・小六・新作・権蔵・正五郎、組々世話役寄合ニて九ツ過迄居帰、早速伏し

同十二日

日々晴天、春之ことし、日中暖気、朝ニ権蔵・儀右衛門・庄右衛門清光寺参、菓子箱寒中為見舞持参、又々権蔵参り、浪人者(カ)籠居候趣ニて穿鑿ニ参候由、堀江町二丁目駿河屋と申家へ先月引越候者之由、桜井金助と申者由、御組ニて召捕候と皆々大勢ひ也

(半丁白紙)

扨登前手伝いたし呉候人々へ礼状遣度候得共とんと隙も無之義ニ付、上りて宜御噺可被下候、此度之次第庄内騒実御物入奉恐察候、御家老衆両人・主馬・隼人其外御用人両人・御番頭四五人・御手廻・御徒・御足軽・御中間其外郷夫四ツ屋へ詰候積ニて仮小屋建積ニ御座候、長州も外国当御用も有之、八ツ過平付食事後、権蔵・文早速出来、四ツ頃

古ニ出ル、

て参候

食之

月三日より七日頃大合戦いたし大負いたし候風分有之、実之義御座候哉、専之噂ニ御座候

【第二十冊終わり】

【第二十一冊】
（二十一冊表紙）
（朱書）「二十一」
（朱書）「正月十一日立之飛脚廿三日着
同廿四日達」

極月十五日ヨリ廿九日迄控

若衆入御笑候　」

極月十五日

日々晴天、昨夜八ツニも可有之哉、兵部殿より明十五日　殿様御用召ニ付、五ツ半時御登　城被遊候間、朝より服紗小袖麻上下着用之事、尤御役人へも可申達と申来、権十郎殿より檎木坂御役人へも夫々達候様申越候ニ付、目覚シ腹立仕候、竹内忘（カ）中ニ相成候事不知、御上屋敷主馬居なから此柳原申遣候事ハ如何之事ニ哉ト申候へとも、無拠夫々申達、朝飯過ニ三内・伊兵衛・庄右衛門抔来り、段々申候所は四品御昇進之由、既ニ御小性頭より御用済、熨斗目と申来候趣ニ付、御家老衆より何とも申不来候得共、熨斗目用意いたし、四品申事ならハ例之紋付上下・足袋いつれも垢付候故、御目見申上候も如何と存、垢不付紋付上下・足袋為持出仕候処大混雑最中、其分ハ四品といつれも察候処御昇進ニは無之、二万七千石御本高被為蒙仰候由御留守聞候趣ニて、万事不都合ニ相成候由、着替候処足袋片方足へ斗二ツ有之、最早御戻も無間模様ニ付、無拠主馬へ助吉を以無心、漸立派ニ相成、御用所へ出候、主馬無間詰、足袋礼申候処大笑被致、無間御戻、十七万石格ニ被為成候、直ニ一役ツヽ御目見申上候、恐悦之段御用所出ル、山口八兵衛を以筋と鶴之御吸被下置候旨申達、有難旨申上ル、無間被下置候鶴、御吸物之法ヲ不知御料理人ニ哉、蓋之上ニ筋も無之、主馬と大笑いたし候、毎日御吸物被下、生鶴之御吸物一杯切ニて些ト喉塩梅不宜、勝て結構也、御不足故歟二切有之、此生鶴は此頃大鹿毛馬献上仕候柳原河岸之米屋綿抜と申御出入町人之差上候て、幸今日御開之積候処へ御祝義有之ニ付被下置候鶴代此方ニては三四両位之由、下ノ関とも、田中弥太郎早追被　仰付ニ付颯と書状さし上候、今日非番故御用相違也　所不引内帰、足袋先頃より置付候分余り垢付候ニ付洗候よふニと小一郎へ申付、其外主馬より貰足袋と二足持帰候、半蔵出、御地走無之間とろヽ上候ても宜敷御座候哉と伺出候間宜敷挨拶いたし、無間とろヽと香物ニて七八杯すヽり、書状を認居候処、弟二・春治・萬右衛門・剛蔵、塩鱈壱本と徳理（利）陶持参、大酔ニて今日御祝義とて大勢ひ也、早速酒出候様申付候処、湯大根ニ根木味噌・菜漬、持参の塩鱈湯煮いたし出シ、大勢ひニて五ツ半過帰候故、三内用事有之参り、九ツ過迄用談いたし帰、伏し

同十六日

誠珍敷天気、寒風難堪、手洗水氷、又右衛門・小六来ル、丸子ちヽ兼て申付置候ヤケール筒出来持参、代金九両二歩渡候、伊兵衛来ル、例刻過出仕、御上屋敷へ参候処九ツ過なり、紺足袋取候処雉子之クソカケ同様之足也、白足袋忘、持参いたし不申、殿中ニては肩衣之御役人紺足袋不被用、無拠真黒之素足ニて出懸候得共寒キ事不被答、押付引取ニ可相成と存居候処へ兵部殿より紙面、拝領物有之ニ付麻上下着用只今出仕可致旨申来ニ付、即多兵衛返事為書、上下書役共居候処へ置候間着替候得共、真黒足恥ケ敷、困居候処へ三内参候間、真角之次第ニて甚泥居候と噺いたし候処、三河町四ツ門之足袋屋へ取ニ被遣候ハヽ、早速参可申と申ニ

付、安吉呼、懐中何程有之哉と糺候処一朱余有之趣ニ付、早々整来ルと申付候処、神田橋向故即整来ル、早速はき出んとする処へ、荻原仁平来り、御用所ニて御待被成居候故早々御出との催促ニ付急キ出候処、被仰渡候上、御上下一具・銀五枚被下置候、御礼申上ル、御小性頭詰所へも出ル、今日御飛脚立故書状颯と認上ル、隼人参り、今晩真鴨頂戴、開候故参呉候様申付(ニ脱カ)、参候事いたし、三内足袋一件ニて拝領物之事覚又々参候間、委細噺いたし候処御祝義可有之、誠恐悦也、六ヶ敷候処を兎ニ角悉出来ニ相成候事容易事ニ無之と申ニ付、参候様挨拶いたし、丸飯を火鉢ニて焼給、七ツ前引取、両老衆御長屋へ御礼出、直ニ隼人へ参り、三内も来ル、暮頃膳出ル、真鴨之吸物ニ鳥之玉とふし・小串・玉子焼・しよふか之地走なり、五ツ頃迄噺いたし帰、晴夜風止、月照、星まれニして神田川小鴨浮絶影也、帰候処半蔵初上下着ニて出ル、半蔵申候は藤八郎殿より小鯛五ツ被遣候、上屋徳左衛門より塩鱈壱本差上候と申出テ、披露也、小一郎ふかし参候とて持出ル、惣吉エ汗ふきと糸針出シ、さくし袋拵候様申付候処、早速縫出来持出ル、此ものくさ太郎も近々湯つかい、垢流し、ひからかし可申候、刀箱先達てより求度心□居候得共延々いたし居候内、大差□出来候事侭有之ニ付半蔵呼、京橋之河岸通ニ引出櫃や刀櫃有之処之趣ニ付一ツ整候様ニと申付ル、半蔵生返(ナマ)事なれとも、皆具足櫃ニ入、不弁理無拠事故参見ルと申返事御座候も半蔵なま返事尤なり、乍去□様事倹約は出来不申候

同十七日

日々日本晴、東都之寒中珍敷、三内参ル、今日出仕日ニ無之候得共御番頭へ達事有之、其外ニ寄合組ホート手続、御家老衆内々引取見分被致候積ニ付出仕、達面伺達、兵部殿へホート稽古場へ御寄可被下旨申述引取、稽古見居候処、為見馬参候趣ニ付稽古馬場ニ参リ一見、三春出ニて青毛六歳也、随分のれ候馬也、我一鞍乗きつとよし、隼人建候ニ至極宜敷、私之望之馬ニ無之故、源五兵衛へ隼人殿御殿ニ居候間、只今鳥渡被引取被見候様可申と、造酒助よりもきつと相応之馬故、明日欤幾日二はん見ニ率為来候も如何ニ付、鳥渡被見候様申遣候処、少待候様ニと申越候、其内昼飯頃ニ相成皆々長屋へ帰、我は榊原長屋へ参り割合丸飯給、十兵衛湯漬給居候処、兵部殿被引取、ホート打場へ被出候得共誰も不居候故御帰候て、一同集候ハヽ為知候様ニと被申置候趣伊兵衛申来、食済茶出し呑、先ツ為見馬見ニ馬場へ参候処、隼人・男四郎・兵部殿も参候故先馬を見ル、源五兵衛又々乗、隼人乗試、都合四鞍乗候得共大丈夫也、隼人至極心ニ叶、三十両位ニ直段附候処相談出来模様也、夫より一同手続稽古見分いたし、十兵衛采揚下知いたし、二十九人いつれも達者ニ相成感心と誉、七ツ頃ニ三内・鋤之助と一趣ニ帰、暮過三内と御組世話役集、廿二三日両日之内大森へ参手分いたし、漸分り三内帰、扨今十七日は浅草之観音歳夜、伏候迄窓(間戸)下引(朱書)へ水をアケ候間なし」も不切寸尺之間」なし足音・噺掛ニて通候処賑々敷、江都へ参りヶ様夥々敷往来初て見、たまけし事也

一、昨日御上下・御金被下置、御祝義と申事始り候故、小鴨汁いたし、隼人父子・男四郎・三内父子へ案内いたし、鳥之梅塩(レ)三内引受、鳥整(トヽ)ニ三内態々日本橋鳥屋参候、御地走上屋徳右衛門ニ貰候塩鱈平ニ藤八郎より遣候小鯛焼物、其外一種申付置

一、昨日御意之上、不存寄被下候ハ、此節御老中同様家来半蔵別て骨折義ニ付紬紋付一ツ・銀一枚為取候、往来余りやかましく不被寝

一、暮過中恵枝柿二十入箱持参、三内抔へ振舞

同十八日

晴天、寒中珍敷暖気、例刻出仕、御用も格別無之、昼過(スキ)御用所被引、今日一寄合組之ホート手続、権十郎殿・我・隼人立寄見分いたし、隼人・

男四郎・十兵衛後より参呉候様申候て馬ニて走り帰、夫々片付候処、無間隼人・十兵衛来ル、男四郎馬ニて来り、玉子五十之宮笥、三内・伊兵衛とき酢（生鮓カ）一鉢宮笥也、吸物小鴨・野鳥・皿小鯛味噌糟漬・平塩鱈・茶椀蒸・鱧之地走いたし賑々敷、五ツ頃帰、今晩も浅草之観音引不切通り有之、四ツ過伏し

同十九日

夜中少々雨降候や水溜りたる処有之、追々晴天、権蔵・金弥・又右衛門来ル、ホート稽古出見ル、昼過織人寒中為見舞来ル、暖気也、早速帰、昨夜之鳥之残物有之間源四郎・中恵呼、暮過権蔵来ル、其内チャン〃〃そら始りと出腰之障子明見候処、先達て和泉守様焼失之方角ニ付、権蔵御組支度為致候様為走候、家来共へも申付候内、火見より呉服橋内と申触ニて、そら近しとて支度いたし、御組も揃、御門前ニて一声鯨波揚走り候処、大草臥腹筋釣緩々行候処、段々鎮火、神田橋辺ニ参候処、弥火元（カ）見へ不申ニ付御上屋敷へも寄候も、入舩本町通りすこ〳〵帰候、大不間〳〵と一同大口説、何方に哉不相分帰り、伏し

同廿日

日々快晴、都は誠珍敷もの也、又右衛門来ル、昼後頭巾・籠手不見大尋、色々考候得共入所忘候、半蔵刀箱尋ニ他行、帰候て無之ニ付注文いたし帰候由、二両三歩位之趣、十手先御登之節二歩余ニテ御求ニ相成候品、二両余ニ相成候、高直もたまけシ候事也、藤助用金之勘定ニ来ル、半蔵算用、夜食出し、九ツ頃迄居、暮過鳥渡庄右衛門来り即帰、九ツ過伏し

同廿一日

日々晴天、暖気如三月頃、庄右衛門来ル、例刻出仕、御用は大森行之事ニて少々有之、織人へ為挨拶鳥渡寄候処膳出し小鯛と筋子地走、八ツ前昼飯也、為見馬参候趣隼人御殿ニて申聞候間、先ツホート備打之手続一見いたし、隼人へ参り、評議之一条兵部殿御長屋参細委（ノ）申述、直ニ馬場へ出ル、兵部殿・隼人・男四郎・織人も参ル、四疋来ル、真先栗毛、二番目青毛、三番目青毛、此馬南部出六歳ニて勝て能馬也、当九月頃荷付を引出候馬之由、前足と言、とも足と言ふ、十分に四足き（キ）候馬に候得共、如何之為ニ哉踏落有之、役馬ニは不相成、玉ニ疵と可申、八十両位と申趣也、一同大誉なれとも源五兵衛不宜と影ニて申聞候間、其事ニいたし相止、四番目之馬は暮過ニ相成、相止早々帰、六ツ半頃帰、庄右衛門・権蔵・又右衛門・兵介来ル、皆々帰、四ツ過より三内長屋ニ参り大森行色々示談いたし、九ツ過帰、伏し

同廿二日

快晴、日本晴暖気之方也、権蔵只今より大森へ三夜泊りニ罷越候趣ニて参ル、即帰、伊兵衛同様ニて寄ル、庄右衛門・権三郎来ル、例刻出仕、御用格別無之、暮之御手当□□差出候処夫々被下置候、品川印鑑組々へ相渡、用意之為五枚懐中いたし引取、綿入二ツニて暖気過、汗ニ相成ル、すくれたる天気、帰候処刀箱出来届居、是迄具足櫃へ大小入置、甚不自由ニ無之ニ付、一昨日付半蔵へ申付為尋候得共寸短ならて新規申付置候処、大片付いたし漸末始合候様（レ）ニ相成候、春之助呼、十兵衛へ遣、金弥詫に来ル、又右衛門呼、伊三郎へ郡司申論候様申遣、三内来ル、明七ツ一趣参候事ニ約速いたし、先達て申付置候割羽織染仕立とも出来来ル、木綿之地如ザルノ帽子、十年已前初（カ）登候節御求被置候分持登候得共、御登之頃とハ大相違形ニ相成候間、当時風ニ為直候処是又出来、日暮ニ手端（テキハ）之程分不申候、庄右衛門来ル、一趣三内参候処、丸飯明日用意ニ門人之鋼（鋤カ）之助ニ為焼居候間、片端より食候処忽尽し、我飯取寄又十四五丸皆々食、庄右衛門海老之てんふら取寄、タカトフ掛、大笑ニて食し四ツ頃帰、明日着服等出し、近習共ハ高イヒキ、不残揃伏し

廿三日

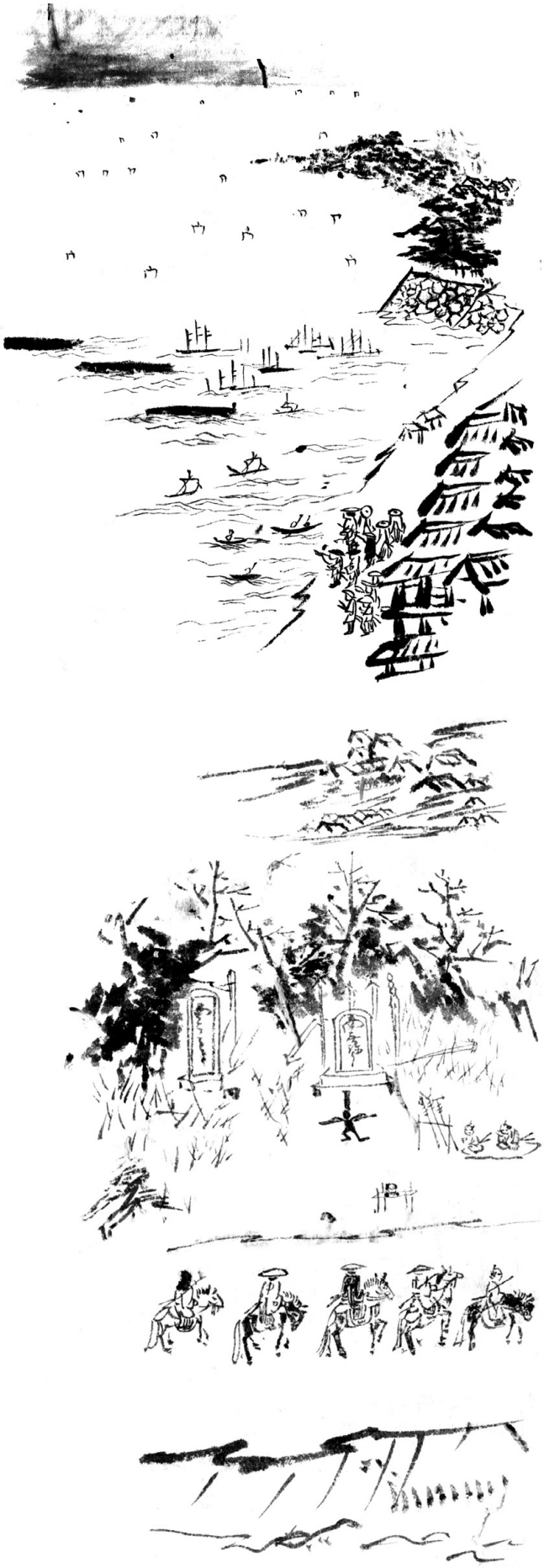
無間眼覚し家来共を起し、何時と承候処七ツと申ニ付火急支度、追々御組ニ被懸仕大不始末、三内も来ル、食事をイタさんと膳取寄給候得共四ツ頃慰ニ丸飯食候事故不被給、漸支度出来皆々出掛、段々承候処刻限八ツと申、一同クノ〳〵いたし歩行しぬ、月明ニて一天ニ雲なし、正月餅突とて町々ニて賑(敷脱カ)々甚甘そふ也、品川宿挑灯ニて通、品川之関所へ鑑札を為見通、同所外よりホノボノ明ニ相成、大森ニ至、町道具ノカラニて土不見、丁場ニ至ル、二十位・巾十丁、丁場海中ニ筑地也、公義へ御願立ニて御拝借相成候故御小人目付も出役有之趣、権十郎殿・隼人・百度・岩五郎・龍吉・神部小太郎・白井弥五郎・御留守居代御馬乗両人いつれも馬ニて参り、夫より打支度いたし、他所よりも見物参ル

（図1入る）

五ツ時より打初、ホート砲玉数百位、此頃より稽古仕候得共出来勝てよし、雷フル砲力様し、五発二十五丁位ヲ打海に入、水立候処遠方ニミエル、七ツ頃打終、白井弥五郎馬ニて参候処、今晩宿止いたし候故馬壱疋不用相成候由ニ付、乗来ル春霞ニ乗候様乗七申ニ付、明日も又参候積故乗、騎馬十人位ニて大森より乗出し、鈴ヶ森ニ懸候処、今朝通候後二十四歳之女火アフリニ相成候と人々集居、道より二三間脇故馬上より一見いたし、さらし首一つ在、夫より乗切無絶間為走、暮頃より寒風難堪、腰手綱いたし、四里位之処六頃御上屋敷着、家来共不続故隼人家来借り柳原へ帰、御組十二人ホート砲為打、無滞相済候故土鰍汁いたし、皆々集大食いたし、八ツ前起候故ねムク不被答、又明日も七頃より参候間皆々返し早速伏し

同廿四日

明七ツ前起支度、晴夜寒サ甚し、栗毛甚思止なれとも為拵、供之者共も支度出来ニ付笹元一ツ付出懸、月明ニして如白昼、新橋先より乗、此頃惣吉へ不遣候処、ハリ居落合故折々為走、若党ニ為持候笹元後より参と



嫌ひ、其内笹元ヲ持若党コロヒ、クハタ〳〵と申音ニて駈出し候得共捻りヂケ、後より早駕籠抔を嫌ひ、ハねルヤラ走り出し、タカナハへ参候処夜明、隼人先参候て休居、夫より歩行して一趣ニ参り、品川之宿入候より又々乗、折々為走番所前ニて下、多葉粉一ふく呑ニ店脇へ入候処、粘引(飴カ)居、長サ二間半位ニ数本引至(カ)り候故皆々へ土産可致と一本当百一枚ニて為整、又昨日見候鈴ヶ森さらし同様にさらされ居、五ツ前丁場ニ至、兵部殿・織人抔参り、御小人目付へ又々兵部殿・造酒助・隼人出、挨拶いたし、五ツ過より打始、今日は昨日と違風無之よし、鰯汁申付候得共無之とて生之貝柱へ豆腐入、外煮〆地走、亭主役隼人・私也、七ツ過怪我も無之相済、造酒助大安堵大悦不斜、兵部殿・隼人・私・弥五郎・賀大夫・織人と馬ニて帰、大森之道(ミチ)□□不残貝クハラミリ〳〵と申音ニて栗毛走り、ヒクシヤクいたし候故一番後ニ相成、折々為走、踏落両三度いたし候得共先達程ニ無之、とても御役馬ニは不相成候馬也、御厩へも能馬も無之故、能馬参次第求度、先達てより数十疋見候得共気合馬無之、榊原三十五両ニて求候馬六歳ニて口も軽ク疳(カン)も有之、早ミキツト参候得共、三春出ニてヨハ〳〵敷模様、乍去大森へ両日続ケ乗切いたし候得共弱り不申、隼人大悦ニ御座候、六ツ過帰、食事いたし早々伏し

同廿五日

晴天、大草臥、例刻出仕、不念伺不及之儀被聞済候故忝なき旨申述、昼過今日定日御飛脚立と多兵衛申出ル、御書達委細御返事認兼、颯と認上ル、八ツ過、七ツ頃帰、暮過より三内へ参り、大勢集居、権蔵只今大森より帰候とて其地名産ムキカラ細工、伝吉へとてヒツキとカンハラ獅(シ)二ツ持参候也、伊兵衛よりも土産とて梅漬と梅越コシ之物物一連物貰ヒ、怪我も無之相済候を大悦いたし、為御祝義フキトリ餅や玉子焼いたし、茶出し、賑々敷、此上はミニケール十年賦ニて数十挺拵、来春越中嶌ニて大丁場之節小銃之備打一始いたし可申とて、懸之面々集候処都合二十人位ニ相成、九ツ過帰、早速伏し

同廿六日

夜中七ツ頃ニも可有之や、主馬より紙面、明廿六日御奉書御至来ニ付、殿中朝より服紗小袖、御達済、熨斗目着用と申来ル、明少過起始末いたし、五ツ前出ル、日々日和誠珍敷事也、今日為見馬参候趣ニ付榊原へ寄合馬場至ル、御厩馬を出し乗、私ハ両日草臥ニて見物いたし、四ツ過より御殿へ出ル、昼過御戻り、直ニ御次へ廻り御目通仕、四品ニ被任、恐悦、御用所へ出ル、四日御飛脚立之趣ニ付颯書状上ル、榊原長屋ニて着物着替へ候故寄、一ふく呑帰、七ツ過帰食事済、三内へ参り、大勢集り居候間用事達兼、又々ミニケール筒趣向始候処都合二十六七人ニ相成候間いつれ早々申上可然と示談いたし、皆々帰候後用達し、九ツ過帰伏し、為見馬不参

同廿七日

日々晴天、庄右衛門・権蔵・東六・政右・楫兵衛・六兵衛・春之助来ル、皆々帰、例刻出仕、家々の門店ニ松竹飾、御屋敷門御玄関前ニケン臺付て有之、是見候へハ正月も近詰候様ニ候得共、心持は落付不申故や、正月参候心持ニて無之、御用達、九ツ過役所引隼人へ寄、織人へ寄、八ツ過引取、天気勝てよし、帰候処半蔵出、正月元日餅等如何可仕哉、明日不得整ハ廿九日ニは整候事不相成候由申ニ付、いつれ元日斗も雑煮祝ひ候よふ申付ル、庄右衛門年暮也とて菓子箱持参いたし

一、今日ミニケール筒二十七挺、一挺ニ付十両ツヽ、十年賦二百七十両拝借申立ル、如何可相成哉、権十郎殿談合いたし候事ニ候得共、御郡代之返事甚無心元、貧(ヒン)なる士ヲ当時利弁相成候用器候得共、出来兼候節如何可致哉、此造酒助唯軍之事のみカヽリ居候て、ヶ様事モクロミ候

も第一争戦と相成候節一番弁器是非出来候様祈念いたし居候、慰ミニは無之、御家之為のみ、乍去何分御物入莫太之時節、織人御説も尤ナリ、私金持ニ候ハヽ二百位は貸し度候得共、是も同様騎将ニて苦々敷事ニ御座候

一、武田耕雲斎、近江ノ湖水辺ニ至候処、加賀之人数・井伊人数・戸田人数・尾州之人数ニ取固候処、加賀ニ付故中納言之心預(カ)是迄登候間是非此一通ヲ一橋公へ届呉候様申候処、公義へ対し敵対いたし候ニ付取受候事不相成とて惣攻之下知之趣、聞繕書ナリとて今日見候、誠不思義千萬之世之中ニ御座候

一、道中筋先ツ静ニも相成候間、兼て脇さし出来ニも候ハヽ大幸便ニ為御登被下度奉願候、角々無理為御登無之様、幸々便も御座候ハヽ、被遣度候

一、明廿八日御目見被為請候旨被仰出候由申来ル

同廿八日

弥晴天、出日ニ無之候得共出仕、三内父子と一趣参り、御戻掛御目見申上候、御用済、御家老引取不申候得共、出日ニ無之故三内誘引いたし引、十兵衛も参り、天気能候間こふろ干ニ一趣とて四人連ニて大廻りいたし、赤金薬鑵一ツ私、鉄瓶一ツ三内、カヤ丁ニて求、昌平橋ヲ渡リ、ユシマ丁よりセイ堂ニ至、数万軒市中見おろし、静光堂之筆屋店ニ寄、朱ジク見候得共能色無し、池之端□(下カ)ニて硯箱入筆墨整、十兵衛手箱、伊兵衛鍔一枚を整、廣小路ニ出、ヲナリ小路真直、暮頃榊原へ帰、半蔵・丸子ちゝ餅・砂糖・大根漬持参、萬屋より為歳暮風呂敷一ツ来て居、食事之地走ハ鰯味噌漬・紫蕨汁、不間尽し皆マケル、食事後三内へ調物有之参り、会合所大勢集居、ミかん・餅、色々地走出ル、九ツ過迄居、帰り伏し

同廿九日

晴天、土屋順吉来ル、三内来ル、例刻出仕、当年調御用伺済、廻方主立頭々へ申達、御書達、颯と御返認、御仏前上リト筋子達候故御長屋へ持帰候様申付ル、八ツ過ニ帰、本間より書状達、鮮遣、楫兵衛東六事・又右衛門・庄右衛門来ル、西堀新作来ル、小一呼、明日は元日ニも候間湯涌しつかい候故暮頃迄と申付ル、サクツ袋糺候得共、被仰付候事覚居候得共、其後忘タリと申、先ツ先達て惣吉へ為縫候袋フカシ入候様申付ル、当御長屋へ参候て一度も湯つかい不申、歳取ニも有之間立派ニならんと湯かたを巨燵ニ為掛、暖気ニて巨燵ニ足先斗入位ニて、湯つかうニ至極日也、黄粉取寄候様申付候処一合位来ル、半蔵心得もきつとよし〳〵、若正月ナリとて酒呑ニ参候ハヽ如何可致哉、酒壱合・肴も無之、有之物ハ筋子九本と時切鮭、勝右衛門為登候分有之のみ、多兵衛歳暮為御祝義菓子一箱持出ル、山中源大夫呼出来ル、湯を取候と申ニ付ツカウ、数月之塵掘(ママ)スル墨ノ如シ、身

梅塩よし、庄内ニて歳暮とて今頃ハ客殿参候半、勝手方ニては鱈汁出来、例年之小鯛も裏返し、御膳建ととてとてメクリ居らんと考、此方引替丸子より貰候大根漬ニ筋子、勝て御風味宜、至極御珍敷甘く給候、一同歳暮為祝義出ル、半蔵いさよ召(カ)御着(キル)物被下置候旨申出ル、気も詰候故餅ヲ焼、黄粉付給ル、自身働也、金弥・儀右衛門為歳暮来ル、今朝中恵来り、三人御扶持被召出、御目見医被仰付候為礼ニ来ル

五ツ頃伊兵衛より菓子一箱、鳥汁一器之内遣候故、菓子箱一ツ移ニ遣候、
其後為歳暮来ル

（一丁白紙）

（中表紙）
「元治ニ丑年控御
笑艸ニ進候、謹言」

元治二乙丑年

正月元日

歳重目出度目覚、日和誠珍敷、東都正月別段、庄内雪吹ナラン、御上屋敷御通御目見済、追々人々ニ被掛仕、上下ヲ着シ、膳出シ、奈良茶椀ニ雑煮盛出シ、目出度千春祝食
（図2入る）
熨斗目上割羽織襠高着シ、如例出立ニテ例刻出仕、正月トテ何方ニモ賑々敷、御用所エ出、御小性頭モ参リ、此方ヨリモ参リ、今日御目見模様ヲ聞シニ庄内トハ別也、
押付御戻ト申注進来ル、例之通大溜ニ主馬ト一趣ニ出ル、無間御戻リ、直ニ御次ニ廻リ、一役一人宛出、御盃被下引、御家老衆始被引取、私引、直廻勤イタシ、織人エ寄茶呑、戸口〳〵ニ札張セ、榊原寄食事イタシ、竹内エ寄割羽織着替、下屋ニ参ル
（図3入る）
市中ハンコイツキ居ルコト屋コト也、別紙ニ印、源四郎エ参、上下ニ着替下屋廻り、仕舞、柳原御屋敷内廻帰、七ツ過ナリ、今宵御組小塚原・千住宿・新吉原廻り之趣ニ付、元日吉原見物珍敷コト故後レテ又蔵ト参、着込着シ鉢金ヲ當テ、小一・安吉・友蔵三人ヲ連急キ行、広小路ニテ一同エ追付、上下共人数三十人余ナリ行、市中休ナリトテ往来人ナシ、静ニテヨシ、千住三丁目定宿ニ至リ茶ヲ呑、宿中謐静ナリト申ニ付引返、小塚原ノ先通、御仕置場前ヲ通、宿至リ一同座敷ニアカリ、取扱丁寧也、酒肴出シ色々断、追々重詰等ヲ出シ、亭主出申ハ、偏御家ノ御蔭ヲ以渡世仕居リ、今日元日ニテ別段ナル日ニモ御座候ニ付一ツ被召上ト強ト申聞候得共、明日ヨリノ御締モ不立、且頭忍行候所ニテ食候ト相成候テモ不宣ニ付、後々迄事断、金一両為茶湯代置、早々足早ニ門出、亭主・町役人五人送出丁寧也、夫より原ヲ掛リ、御仕置場前ヲ通、土手ニ上リ、夫ヨリ新吉原大門ヲ通、番屋先立ニテ不残廻見、元日ナリトテ女郎不張、サヒ敷吉原ナリ、格子内ニ二朱位ヨリ百文位女郎六七人又四五人位宛火鉢集、廻見物イタシ居、何分四ツ過ニ相成□□サヒシキ事、番屋家々ノ戸ノ口前ニ至り、御廻ト触込ト亭主如図戸口手ツキ頓首イタシ居体立派也、一廻シテ引揚、土手ヨリ戻、雷門ヲ通リ柳原御屋敷エ子刻半帰、早速伏シ

同ニ日

日々晴天、今日ハ昨日始テ　御盃御頂戴被遊恐悦ニ付、例刻出仕シ御用所恐悦申述ル、昼頃役所〳〵引、隼人・三内ト一趣町廻至(カ)イタシ、七ツ頃柳原へ帰、隼人上下ニ着替、柳原御屋敷廻勤イタシ、半蔵出、先刻兵部様御出、シハラク御待被成居、菓子茶出候ト申聞、隼人廻勤済寄候間止候得共帰ル、夜食塩鱈ノ平・皿自切(ジ)イカノス味噌掛・筋子色々地走也、馳七大酔ニて来ル、酒出シ大弁シ大笑イタシ、五ツ頃三内モ来ル、別テ賑ヤカ也、馳七五ツ過帰、三内四ツ過迄居リ帰、早速伏シ

同三日

曇、三内ト伊兵衛一趣来故御上屋敷エ大通ヨリ本丁通、凧絵二枚整出仕、御家老ニ斬(軒)エ昨日之為挨拶参、引取後食事致、久舞ニテ昼寝イタシ春之助ニ被起、夜食後又右衛門・直矢・春之助・三吉噺ニ来ル、フキトリ餅搗、此方ニテハ阿部川餅也、春之助搗カタク皆々閉口シ、四ツ頃帰、牛兵衛叔ヨリ塩引ノ味噌漬来ル、書状添、早伏シ、折々雨ノ音イタシ

同四日

雨天、清光寺行延引、庄右衛門来ル、今日休足日ニ付終日此方模様画、誰モ不参閑日也、暮頃順吉来ル、六ツ過権蔵来ル、早速帰、甚暖気夜着三ツ掛居候得共一ツ取、鬱陶敷天気、折々雨之音イタシ、伏シ

同五日

今日曇候得共天気也、三内寄、例刻出ル、昼引取十兵衛・弥太郎ト一趣ニ柳原ニ帰、柳原ニテ柳橋藝者ノ年礼ニ逢、カホ悪(悪)敷候得共風ハ勝テヨシ、ツマヲトリ候体造酒助筆ニテトテモ画コト不成、十兵衛トツラ要敷モト藝ノ能女ニモ可有之噺ナカラ帰、色々出火之節御人数出ノ相談イタシ、春之助来ル、阿部川又々為搗、今日少手ヲ揚候ト誉ル、七ツ過皆々帰、夜食後三内へ噺行、竹内ノ御組加賀山林蔵呼、深川一件委敷為噺、大笑イタシ、腰巻無之前ニ手ヲ當、マルハタカニテ大勢前ヲ腰コゞメ通、馬鹿〳〵敷目ニ逢シト申ニて又々大笑イタシ、四ツ過帰、伏シ　今日水天宮トテ賑々敷往来も有之、半蔵、多兵衛抔出候て札請帰　年ノ初五日

同六日

曇ル、庄右衛門来ル、源四郎来ル、今日休足日ニテ大休、正月モ松之内故又々画、エノ具無之ニ付吉蔵呼少々取寄ル、他行ハ物入、何分懐中乏敷、心ノ侭ニモ不成、却て不出方増也、極ホシキ物モ無之、兵衛主馬改名抔何程金有之ニ哉、一ヶ月ニ廿度出可申、一日ニ三両位宛ツカイ候由、当春西廻シ舟へ長持一棹頼候、色々整帰、不面白品ハ四五日過返候ニ付、家来共先エ参、掛合ニ泥候由、ヨク〳〵我侭□□可申、病気ト号当春下ル積ニ致居、徒組モ頭申為ニ下始末ニ候得共、兵衛事ハ市中弥御静謐相成候、下被仰付ハ私下候後トカ、又一趣トカニ不相成筈、私ハ元ヨリ一年詰ノ心得ニテ登候間、御用ニ立居候ハ幾年詰候モ御奉公ニ候得共、竹内ハ長州一件ニ登、其後御供御免被為蒙　仰、尚又市中御取締厚相勤候様被為蒙　仰候ニ付、竹内下、加藤御差留ニ相成候処、不斗病気ニテ下、実病気無之、日々他行、詰合一同之沙汰ニ相成、私事ニいたし□□□見居候事も松寿院伯母様へ対して情旁御小性頭衆と相談いたし候上、両大夫へ取扱申述、組漸(暫カ)はなし、御家老衆為御沙汰御上屋敷西御物見へ移し、少ハ遠慮いたし可申と存候処、口ニは柳原ニ居候節より心之侭ニ不相成と口説候得共、不相替他行不止、折々ハ中間壱人抔ニて帰り、以之外悪敷風聞有之、一同組之内、他行いたし候所見ツケられ、かくれ候事も有之抔申風聞も有之ニて、尚又隼人と相談、六度他行外不相成候様ニと権十郎殿とも斗ひ候得共、尓今其沙汰も無之、却て下候方諸士之御締も付可申候得共、カトナク唯下と相成候ては兎角私より後より登候姿故、私

御組彼是申聞候事も有之候得共、大笑いたし帰候、一体病気之為平右衛門殿より四月下候様被申候由ニ候得共、医者を始、誰兵衛病気ト見候者壱人も無之、證櫨(拠)ハ天気能、非番斗ニ無之、当番日ハ御小性頭初私へ頼合出懸候事ハ遠慮会釈一切無之、私ハ四月下、兵衛八月下ニて相当ニ可有之、乍去長詰相成候てハ物笑イタサレ候斗ニテ役ニ立不申、乍去役立じとて不順ニ私差留、先ニ帰候てハ御役ニ対しソトマル物ニハ有之間敷、唯今ヨリ長引込、四月頃ニ病気下候へハ脇へハ響申間敷、左モ無之我侭イタシ、病気ニモ無之者病気ト偽リ遊ナカラ下テハ諸士取扱且頭役モ勤、右之通ニテ下事ニ相成テハ御締処ニ無之、私共諸士取扱出来不申、苦々敷、御政体ト一藩(イッハン)ノミタレニ成可申、私共ニテトテモ扱出来ヌ事也、旧年被仰下候通、構不申所存ニ御座候得共、イツレ宗右衛門上リ候ハヽ、此書ニ無之、唯々噺序ニ能考も可有之間御噺置可被成下候

御組寄合ニて集、四ツ頃帰、早速伏し、九ツ頃明七日四品之御礼ニ御登城為御祝義御酒御吸物被下旨主馬より為知也

同七日

雨天、例刻出仕、道如コシアン、松引候処も有之、尓今ケン臺建置候処も在、御戻掛御目見申上、一役一同御用所へ御祝義ニ出、御酒・御吸物、御行列以上被下置候、御膳之上貝柱・千大根・蛸ノ三梅漬一皿・小串二切一皿・御吸物・魚菜(ナ)下地味噌、頭取出、御庭御獲物ニて御頂戴被仰出候とて小鴨二羽被下置、次之間ニて御礼申上ル、昼後引取、雨天ニて道難義、帰候て休足之処へ駒蔵・文三郎参り、夜食後岡吉来ル、庄内より迄茶ありきいたしと申来、苦々敷事なりと申大口説也、大かもひいたし、四ツ過伏し

同八日

雨晴候得共鬱陶敷天気、今日三内と申合置、清光寺へ朝より参候約速なれとも天気無覚束候、三内も来ル、雨天ニ相成、不肖〳〵ニ清光寺へと出懸、店々ニ寄、八ツ頃漸増上寺地内より清光寺ニ至、大梁院様拝し直ニ戻り、大雨ナリ、道コシアンノコトシ、八ツ過ニ相成候得共食事不致空腹難堪、泥道ニあした・手傘、手ニ豆出ル、鱣ノかは焼フン〳〵としてて鼻ニ入、能茶屋無之、漸能茶屋有之候得ハ人一杯入込、田舎者入候事不相成、権蔵も連行空腹口説、終ニ暮頃迄食事不致、大雨降ニ帰、足袋地の不見程泥ニ相成、漸はひ付、豆腐汁申付、外ニ地走も無之故先刻かは焼思出し、暮掛鱣を柳橋ニ取ニ遣シ、権蔵・三内膳持参候様申遣候処、権蔵ハ鰯煮漬と一陶持参、三内ハ一土瓶ニ塩引持来ル、腹はへ、足草臥、手ハまめ出し、袴から足袋下駄無透泥ニいたし大弱り大口説、登候後朝より他行いたし候事三度、二度ハ清光寺、一度ハ冷飯、一度食事不致、一度ハ本所行のみ、江戸之面白事抔ハ一ツも知不申、能所哉悪敷所哉(と脱カ)とん不分、唯雪不降所よしと可申哉、雨之節泥道大難義、此節暖気也、漸豆腐汁出、鱣之百疋分も来り、余り空腹過一向不被給、六七杯食し腹ハシヤキハリ、足を延、皆々大噺始り、四ツ頃ニ相成候て腹漸ヤハラキ、貰置候甘物を給、茶呑、九ツ頃両人とも帰、即休

同九日

雨天、今日昨日引替寒、又右衛門来ル、今日出仕日ニ候得共調物之為不出、雨へ折々白キ物マシリ降、雪ならん、十一日御飛脚立之趣ニ付、伝吉へ色々箱入ニいたしさし下、文次・弓矢多・あかへ先達て権蔵より土産貰置候大森名産ムキカラ細工箱へ入候所、カラコロいたし候故、小一へ箱一杯ニ相成候様見立来れ□□候処、一杯過世話ヤキ候得共無理ニ入封し、外ヒストール一挺道具共、並クハン入一包ニいたし三包ニ封し、二日立へ上候積ニて整候茶一包、都合四包ニいたし明日誂候様申付、清光寺使増(ママ)ニて風呂敷一ツ・扇子五本年頭為御祝義遣候、暮過岡吉来ル、

四ツ過迄色々書物いたし、伏し

同十日

鬱陶敷天気、今日雨模様無之、色々認物いたし、八ツ頃十兵衛来ル、丸子ちゝ参ル、暮前帰、こま飯・たかせ・三内父子・庄右衛門、今日は三度来ル、九ツ過迄居、夫より認物いたし、七ツ頃ニ伏し

同十一日

天気よし、今日御行列以上五ツ時年頭之御目見被為請候旨被仰出候ニ付、且御具足餅被下置候旨昨日申来候ニ付明半頃三内・庄右衛門と一趣出仕

（中表紙）
「正月ニ至先得寸閑、極月十四日後控書、東都餅搗始として、御笑艸の繪他見余々御無用、若衆へ進し候」

（図4入る　極月廿三日暁大森行見たる図）

（図5入る　正月元日年礼図）

（図6入る　江戸中正月はんこひつきの図）

（図7入る　丑正月元日新吉原中町廻造酒助黒羽織着シ笹元腰に差、能見候得は美人□居図也）

（図8入る　正月初ての捕者竹内組高名図　三日明）

元治二乙丑年正月三日之日、今暁深川仮宅ヨリ注進有之趣、御殿へ詰ノ所へ申聞ル一件致如何哉問ヒシニ、今暁八ツ過ニ深川仮宅佐野橘屋ヨリ只今酒井ノ家中トテ、往来ノ駕籠挑灯ヲ切ナトシ、且強談シ刀ヲ抜候故、早速御人数出シ被下度旨御留守居方迄注進申出ニ付、権十郎殿エ申述ル、注進再度ニ成、主馬ニ被達、非常詰今夜ハ自分組ニ付、加賀山郷兵衛呼出シ達サレ、大騒ニテ二拾人、タゝキ柳六ニ発足、深川佐野橘屋至、夜不明、亭主ヨリ委細聞、両人供八畳ニ女ト供ニ伏居候ニ付女共エ為知可申哉ト申候得共、萬一聞被附候テハ（ママ）要シク故不為知様申含、詰リ〳〵ヲ聞、當人ハ二階居ニテ、一組一番踏込郷兵衛・郷右衛門・庄三郎・三之助、二番ハ階子邉ニ扣居、手ニ余リ候セツ切捨打殺勝手次第、三番手ハ搦手廻リ居、用意手配ハ出来シ、客屋故大小不残取仕舞置候ニテ一安堵イタシ、ソラト一声ニテ二階登リ候所（トコロ）、足音驚候テ壹人ノ合方女郎アカハタカニテ西ノ部屋ニ逃走リ入候、女床ヨリ出タリ驚トコヨリ出タルヲ郷兵衛・郷右衛門搦取、速ニ□□、荘三郎・三之助ハ別□（床カ）ニ登リ上リ押候取（ママ）、両人共高イビキ、カラミ鎗ニテ後之方突抔致候処両人驚目覚シ床ヨリ走リ出シ、両人共マルアタカ、女ハ東ノ部屋奔リ、緋縮緬無之前へ手ヲフサキ、コ（コ）□ミテ二番備ノ前ヲ通候由、其体絶言語シタリト申、男モフントシモ無之床ヨリハイ出ケシキ無慙ナル由、着物キセ縄ヲ掛、段々相糺候所、佐竹手廻一人ハ足軽（数文字分空白）ト申者ニテ門ヲ忍出、表ニ相成候テハ私共斗ニ無之、門番人エモ難義掛候、ユルシ呉候様詫申候得共、両人共縛、駕籠ニ入、御上屋敷引付直ニ御町奉行連行引渡候由、一度大笑、一度□事イタシタト思候得共、過候事ニ相成、右様之節ハ其於場イカ様ニモ取斗可有之所、内々ニテ不為済事ヲ内々達置、當年之初陣奇々□□後々之コトハ甚ケンノンニ御座候、備共先一同ノ沙汰□□□□リ

（図9入る　正月凧揚　正月乞食）

正月車引始メ賑々敷

（裏表紙）
「六日迄正月致休、明日ヨリ又々□□物も有之、得隙候折ハ可□進候、呉々も他へ為見候事御免希候」

【第二十一冊終わり】

解題にかえて

今回の翻刻部分には色彩を使って丁寧に描かれた挿絵が多くあり、カラー図版で紹介した。中でも年末年初の諸事を描いた絵（カラー図版④⑤⑥⑨）は出色。図④は職人が杵・竈・蒸籠などの餅つき用具一式を担いで家々を回って餅をつく様子を描く。図⑤は武士の年礼廻り。供一人を連れ徒歩で回る侍や挟箱持・鑓持まで従えた騎馬の武士まで、身分相応の年礼廻りの多様な姿が一画面中に描かれている。また門付けをし新年を寿ぐ「鳥追い」の姿（図⑨）、羽子板を突く女性や凧揚げをする親子（図④・⑨）など、正月風俗が活写されている。

図⑦は市中取締組が、深川仮宅（吉原の廓が火災で使えないときの吉原外での仮営業店）で狼藉者を捕縛した時の顛末を伝え聞いて描いたもの。寝込みを踏み込まれて素裸で慌てふためく男と逃げ出す女郎、組み伏せられる別の男を躍動的に描いている。画中の空白部分に文章を書き込むのは黄表紙本などを真似たのであろうか。現場のドタバタ劇を、まるで見てきたように描いた滑稽味のある絵である。

これらは、「今日休足日ニ付終日此方模様画」（正月四日）、「正月も松之内故又々画…ヱノ具無之ニ付吉蔵呼少々取寄ル」（同六日）など、絵具を使って時間をかけて描いたことを伝えるが、「若衆」（子供たちのことか）に見せるための「御笑艸之絵」なので他見無用としている。

図①は十二月二十三～四日に、大森海岸での「ホート砲」実射演習の様子を描いたもの。「ホート砲」とはホーウィッツル（ホーイッスル）砲の事であろう。この演習には老中・若年寄などの幕府首脳も臨席し、他所からも多くの見物人が集まった。日頃の訓練の成果を発揮して成功裡に終わり、造酒助は安堵するが、意気上がる組の者たちは今度は「ミニケール筒」（ミニエー銃）数十挺を導入すべしと息巻く。造酒助も「西洋流ニ無之ハ不済世之中と相成候」（一二月一二日）と、西洋銃火器の優位性を十分認識しており、同銃二十七丁分の購入資金二百七十両の拝借を申し出るが、財政担当者は難色を示す。「何分御物入莫大之時節…尤也」と事情を理解しつつも、自分が金持ちならば二百両位は用立てるのにと不満を記す（十二月二十七日）。庄内藩が西洋銃火器の導入に積極的であったことはよく知られているが、これらのエピソードから造酒助がその推進役の一人であった様子が窺える。出入りの武器商人と思われる「丸子のぢゝ」（丸子松斎）が造酒助のもとに洋式短筒や小銃を頻繁に持ち込んでいるのもこうした事情を背景としているのであろう。

今回の翻刻分には他にも興味深い挿絵が多い。図③は元日に盛装した藩主酒井忠篤（ただずみ）。このとき忠篤は十四才で、造酒助はその姿が「愛々敷」と記す（同図屏風）。また十七頁上段は〈カステーラ一気食いの図〉である。一箱の価格が金一分余のカステラを朋輩四人で分け、むせびながら食べた有様を戯画的に描き、後々の噺の種になると記す。

日記には藩政の枢機に関する情報はほとんど記されていない。日記の性格（国元家族への近況報告）によるものか、造酒助の藩政上の地位によるものかは不明である。また、話が飛んで前後関係が理解しにくく難解な箇所がままある。現在、造酒助が在勤中に国元の父親宛に出した書状（鶴岡郷土資料館所蔵「松平武右衛門文書」）の解読も進めている。両者を突き合わせることにより、本日記の理解が進むことが期待される。尚、日記はほぼ毎日記されているが、十二月十五日から二十三日の間の記事がない。元々記されなかったのか、後に失われたのか不明である。

付記　本報告はＪＳＰ科研費JP18K00951の助成を受けた研究の成果の一部である。